

# 天神下・土用ヶ谷戸遺跡

送電線路増強工事（東埼玉線）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

1984

熊谷市教育委員会

東京電力(株)埼玉支店

## 序 文

熊谷市北西部の別府・奈良地区には、県指定文化財・農夫の埴輪を出土した古墳、横塚山古墳などの古墳や、縄文時代から中世まで連続する集落址、また、両地区にまたがって広がる別府条里遺跡などの重要な遺跡が存在することが知られています。

同地区において、東京電力株式会社の既設送電線・東埼玉線増強工事が昭和58～59年にかけて実施されることとなりました。本市教育委員会では、東京電力株式会社から委託を受け、工事予定地内の遺跡の発掘調査を実施いたしました。

発掘調査は、湧水や寒風のため困難いたしました。数々の遺構・遺物を検出し、無事に終了することができました。

本書は、昭和58年度に実施した発掘調査の成果を、昭和59年度に整理し、報告するものです。本書が、郷土の歴史を知るうえで、また、学術研究のうえで活用されるならば、幸に思います。

最後になりましたが、本調査にあたって、県文化財保護課、東京電力株式会社埼玉支店、尾瀬林業埼玉支店、ならびに地元奈良・別府地区の方々を初め、多くの方々からご指導・ご協力をいただきましたことに対して、深く感謝の意を表します。

昭和59年7月

熊谷市教育委員会

教育長 関根幸夫

## 例 言

1. 本書は、東京電力株式会社埼玉支店の既設送電線（東埼玉線）増強工事に伴う、天神下遺跡、土用ヶ谷戸遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、東京電力株式会社埼玉支店からの委託により、熊谷市教育委員会が、昭和58年10月1日から12月24日まで実施した。
3. 調査組織は次のとおりである。

調査主体者	熊谷市教育委員会教育長	関根幸夫
調査担当者	〃 社会教育課主事	寺社下博
事務局	〃 社会教育課課長	岡田 詮
	〃 〃 課長補佐	茂木 優
	〃 〃 係長（前）	岡田伸洋
	〃 〃 〃（現）	北 俊明
	〃 〃 主査	山川 建
	〃 〃 主事	金子正之
	〃 〃 〃	島野嘉寿子

4. 出土遺物は、熊谷市教育委員会で保管している。
5. 本書中使用している図の縮尺は、遺物については全て三分の一である。遺構については各々異なるので、各図中にスケールを付している。
6. 図版・写真図版に用いる遺構名は、住居址・H、溝址・D、土坑・P、竪穴・Sの略号を用いた。遺物実測図中、単独遺構出土遺物で一図版となるものについては、略号は無く、遺物番号のみを付している。また、例えば4-4のように数字のみのものは、調査区番号-遺物番号を示す。この場合は、第4調査区の4番の遺物ということである。
7. 遺物実測図中、断面黒塗りは須恵器を示す。
8. 遺物実測図における中心線は、遺物を回転させず実測したもの・実線、180°回転させたもの・一点鎖線を用いて区別した。
9. 遺構図版中、斜線は炭化材を、点々は焼土を示す。
10. P L . 2 遺跡周辺航空写真は、中央航業株式会社が昭和35年に撮影したものを合成したものである。
11. 本書の執筆・編集・写真撮影は寺社下博が担当し、遺物整理・図面の作図・浄書等に稲村しず、岩瀬悦子、小川信子、金井和子、草間サキ、小島高二、樋口政江の協力があった。

# 目 次

序 文	I
例 言	II
目 次	III
図版目次	IV
写真図版目次	V
I 調査に至る経過	1
II 遺跡の立地と歴史的環境	2
III 発掘調査の概要	7
IV 遺構と遺物	12
1. 土用ヶ谷戸遺跡	12
(1) 第3調査区	12
(2) 第4調査区	14
2. 天神下遺跡	17
(1) 第5調査区	18
a. 溝址	18
b. 竪穴	20
c. 第5調査区出土遺物	21
(2) 第6調査区	24
a. 1号住居址	26
b. 2号住居址	27
c. 3号住居址	28
d. 4号住居址	30
e. 5号住居址	31
f. 1・2・3号竪穴	32
g. 1号土塚	34
h. 2号土塚	35
i. 3号土塚	36
j. 1号溝	37
k. 遺物包含層	38
l. 第6調査区出土遺物	39
V. まとめ	55

## 図 版 目 次

Fig.

1. 遺跡の位置及び周辺の地形	2
2. 周辺の遺跡	4～5
3. 第1・2・3調査区位置図	7
4. 第4・5・6調査区位置図	9
5. 第7・8・9・10調査区位置図	10
6. 第7・8・9・10調査区土層図及び柱状模式図	11
7. 第3調査区区域図及び土層図	12
8. 第4調査区区域図	14
9. 第4調査区遺物出土状況及び土層図	14
10. 第1・2・3・4調査区出土遺物実測図	16
11. 第5・6調査区区域図	17
12. 第5調査区遺構配置図及び土層図	18
13. 第5調査区竪穴炭化材出土状況	20
14. 第5調査区出土遺物実測図	22
15. 第6調査区遺構配置図及び土層図	24
16. 第6調査区1号住居址	26
17. 第6調査区2号住居址	27
18. 第6調査区3号住居址	28
19. 第6調査区4号住居址	30
20. 第6調査区5号住居址	31
21. 第6調査区1・2・3号竪穴	32
22. 第6調査区1号土塚	34
23. 第6調査区2号土塚	35
24. 第6調査区3号土塚	36
25. 第6調査区1号溝	37
26. 第6調査区出土遺物実測図(1)土師器杯	43
27. 第6調査区出土遺物実測図(2)土師器・土錘	44
28. 第6調査区出土遺物実測図(3)2号土塚出土一括	45
29. 第6調査区出土遺物実測図(4)須恵器・包含層出土一括	46

## 写真図版目次

PL.

1. 発掘調査風景 左・第10調査区、右・第3調査区	1
2. 遺跡周辺航空写真	3
3. 第1調査区遺物出土状況	7
4. 第2調査区(南より)	7
5. 各調査区発掘前状況	8
6. 第3調査区 上・礫層平面、下・土層堆積状況	13
7. 第4調査区 上・全景(南より)、下・遺物出土状況	15
8. 第5調査区溝址 上・全景(東より)、下・土層堆積状況(北より)	19
9. 第5調査区竪穴 上・全景(北より)、下・炭化材出土状況	20
10. 第1～第5調査区出土遺物	23
11. 第6調査区 上・南壁土層堆積状況、下・遺物出土状況	25
12. 第6調査区1号住居址(南より)	26
13. 第6調査区2号住居址(東より)	27
14. 第6調査区3号住居址(南より)	28
15. 第6調査区3号住居址 上・カマド焚口(東より)、下・遺物出土状況(東より)	29
16. 第6調査区4号住居址(東より)	30
17. 第6調査区5号住居址(西より)	31
18. 第6調査区 上・1号竪穴、下左・2号竪穴(共に南より)、下右・3号竪穴(東より)	33
19. 第6調査区1号土壇(北より)	34
20. 第6調査区2号土壇(北より)	35
21. 第6調査区3号土壇(南より)	36
22. 第6調査区1号溝(南より)	37
23. 第6調査区遺物包含層内出土状況 上右・埴(C)、下左・白玉(E)、下右・管玉(F)	38
24. 第6調査区出土遺物(1)土師器杯	47
25. 第6調査区出土遺物(2)土師器杯	48
26. 第6調査区出土遺物(3)土師器	49
27. 第6調査区出土遺物(4)2号土壇出土遺物	50
28. 第6調査区出土遺物(5)土師器整形痕	51
29. 第6調査区出土遺物(6)須恵器	52
30. 第6調査区出土遺物(7)包含層出土遺物	53
31. 第6調査区出土遺物(8)上・2号住居址出土遺物、下・4号住居址出土遺物	54
32. 第6調査区出土遺物(9)上・1号土壇出土遺物、下左・土錘、下右2号土壇出土土製支脚	55

## I. 調査に至る経過

東京電力株式会社埼玉支店では、県北部地域の開発に対処するため、既設送電線（東埼玉線）の増強工事を計画し、昭和58年6月8日付で埼玉県教育委員会に対し、工事区域の埋蔵文化財のとりあつかいについて協議書を提出した。

埼玉県教育委員会および熊谷市教育委員会の確認調査の結果、熊谷市西別府・東別府に位置する、鉄塔No38・39・40・41については、別府条里跡に含まれる可能性を有するので試掘して確認すること、鉄塔No45・46についても遺跡の周辺にあたるため試掘して確認すること、また、鉄塔No42・43・44、妻沼線No2については、天神下遺跡、土用ヶ谷戸遺跡にあたるため発掘調査が必要であることが確認された。

確認調査の結果、6月24日付教文313号で、埼玉県教育委員会より東京電力株式会社埼玉支店に対して、上記の旨回答がなされた。

これにもとづき、東京電力株式会社埼玉支店では、用地業務代行社尾瀬林業株式会社埼玉支店を通じて市教育委員会と協議し、工事着工前に発掘調査を実施することとし、調査を市教育委員会に依頼した。

市教育委員会では、昭和58年9月24日付で東京電力株式会社埼玉支店と埋蔵文化財包蔵地発掘調査委託契約書を締結し、同年10月1日より発掘調査を実施した。



PL. 1 発掘風景 第10調査区



第3調査区

## Ⅱ．遺跡の立地と歴史的環境

天神下遺跡（A）は、熊谷市大字上奈良字天神下に所在し、土用ヶ谷戸遺跡（B）は、同字土用ヶ谷戸から二ッ道にかけて所在する。両遺跡は東西に隣接しており、利根川の南5.8km、荒川の北4.8kmに位置する。

天神下遺跡は標高30m 付近に位置し、地目は水田となっている。土用ヶ谷戸遺跡は、標高31m 付近に位置し、桑畑もしくは豆畑となっている。

両遺跡の西に位置する、現別府の集落は、榎引台地（高位扇状地）の東北端を成し、氾濫原との境界は、北（妻沼低地）では断崖を成し、東（熊谷低位扇状地）では緩傾斜で連続する。この緩斜面は、主として荒川の氾濫によって形成された自然堤防が、現在では連続した形態を示しているものと考えられる。この緩斜面が、荒川本流域に源を発する小河川（南西から北東行、南から90度屈曲して東行等）によって寸断されている状況からこのこととはうかがえるのである。

このような自然堤防上に両遺跡は存在するのであるが、両者の層位は全く異質であり、同一の微高地上に位置するものではないと思われる。

この低位扇状地にみられる自然堤防は、しかしながら、荒川によってのみつくり出されたものと考えられず、利根川が強く作用した年代も確実に存在する。このような両河川の相剋作用によってつくり出された自然堤防帯は、玉井→奈良→上中条→南河原、上中条→大塚→犬塚、柿沼→肥塚→上川上→星川等に見ることができ、多数の遺跡が存在することが最近の発掘調査で知られてきたのである。

以下、時代別に、榎引台地から自然堤防帯にかけての遺跡分布について発掘資料を中心に記すこととする。

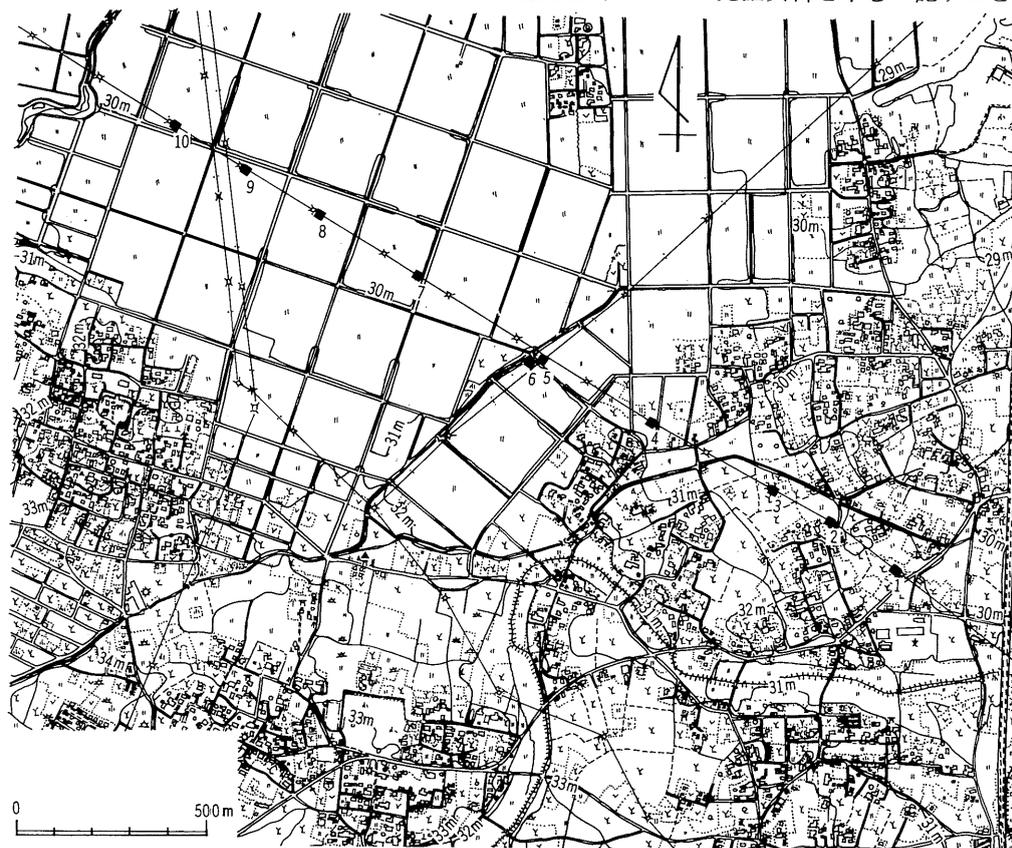
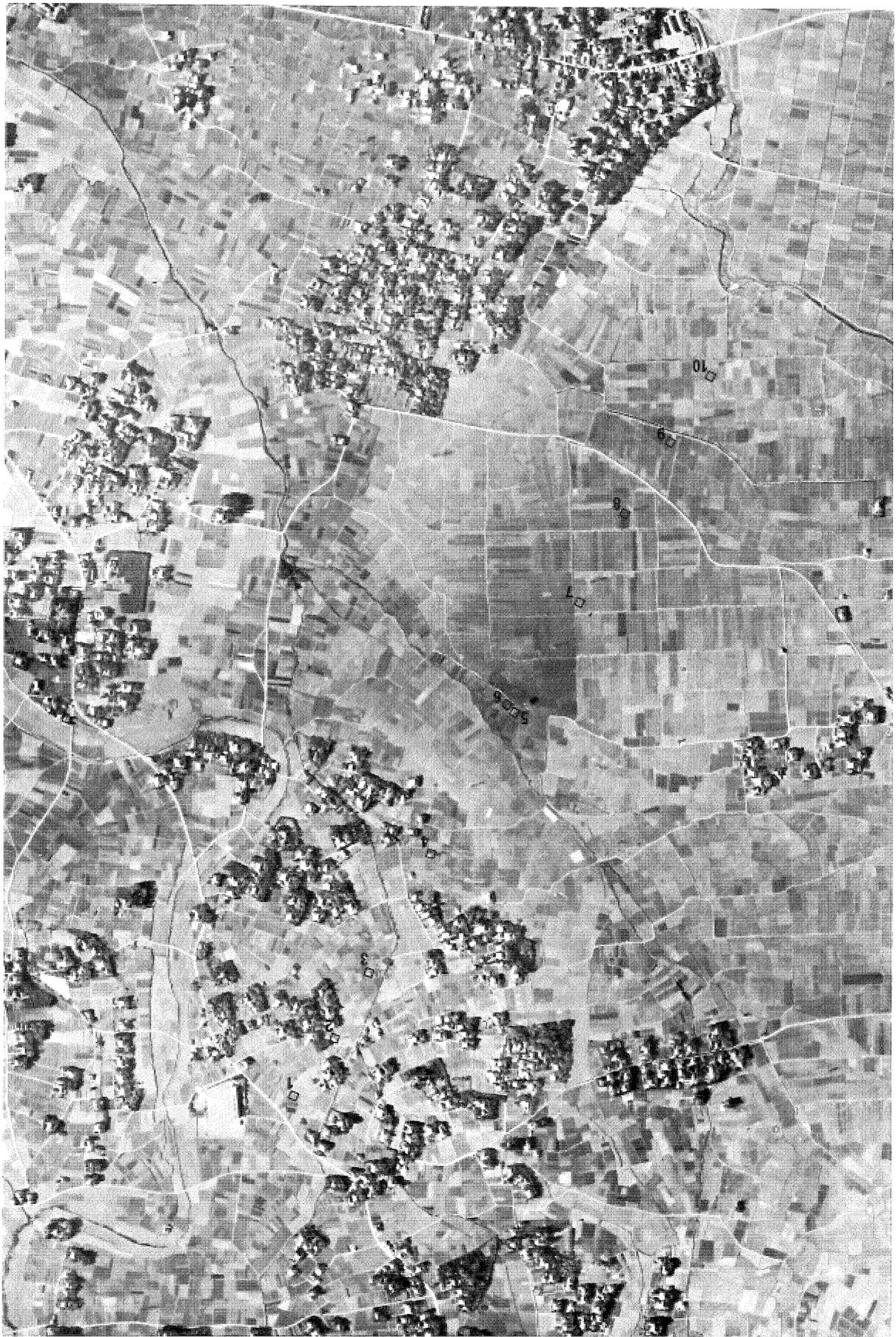


Fig. 1 遺跡位置及び周辺の地形



Fig. 2 周辺遺跡



PL. 2 遺跡周辺航空写真

先土器時代の遺跡は知られていない。櫛引台地上の三ヶ尻林遺跡（1＝以下本文中に記す番号は、第2図に示す番号と同一）では、縄文時代前期の集落址が調査されている。西・東別府の櫛引台地上には、縄文時代中期の遺物が散見される（3・53）が、内容は詳でない。東別府の北東端、現水田下で発見された寺東遺跡（2）は、柄鏡形敷石住居、土坑、埋甕が検出されており、中期末から後期初頭の遺物を伴っている。寺東遺跡は、現地地表下2～3m掘り下げた地点でローム面が検出されていて、北東への傾斜面を成しており櫛引台地の北東端部であることを示している。低地帯においても縄文式土器は散見されるが、実態は明らかになっていない。

弥生時代中期の遺跡は、2基の再葬基が検出された深谷市上敷面遺跡（4）、再葬基から壺形土器が3個体検出された妻沼町飯塚遺跡（5）、再葬基および住居址の検出された妻沼町飯塚南遺跡（6）等、利根川の自然堤防上に位置するもの、壺形土器5個体が検出された三ヶ尻上古遺跡（7）のように櫛引台地上に位置するもの、環濠集落の検出された池上遺跡（8）および池上西遺跡（9）、2個の壺形土器が出土したといわれる平戸遺跡（10）のように、荒川扇状地の扇端（湧水地帯）に位置し、利根川と荒川の両河川の作用が混合する地域に所在するものの三種類の占地形態がみられる。出土土器をみると、利根川の自然堤防上（妻沼低地）の出土例、台地上からの出土例に古い様相がみられ、荒川扇状地扇端部からの出土例にやや新しい様相が加わってくる。遺跡としても、点の存在から面としての広がりを見せるようになる。しかしながら、継続性が無く、依然として定着した農業経営はなされていない段階であるといえる。後期の遺物は前記池上遺跡で出土しているものの、他では一遺跡で数片出土するのみであり、全体量は極めて少ない。

古墳時代前・中期の遺跡は、低地帯に広く分布する。妻沼町弥藤吾新田遺跡（11）は、2度の調査によって、弥生時代末期～五領期～和泉期の住居址が13軒検出されている（弥生町期1軒、五領期10軒、和泉期2軒）。弥生町期の遺物・遺構は当地域では稀であり、重要な資料である。五領期の遺物は、甕・壺の組み合わせに興味をもたれる。和泉期の住居址のうち一軒に初源的なカマドがみられる。弥生時代末期から和泉期への連続した集落遺跡として弥藤吾新田遺跡の果たす役割は大きい。同じく妻沼町の上江袋遺跡（12）では五領期の住居址が一軒、さらには、東方の妻沼町鶴ノ森遺跡（13）でも五領期の住居址が一軒検出されている。妻沼町内に所在する五領期の遺跡から出土した甕形土器のうち、主体を占めるのは石田川系のS字状口縁台付甕であり、利根川をはさんでの広域圏が想定される。熊谷市内の荒川扇状地扇端部に位置する東沢遺跡（14）では、五領期～和泉期の土器と共にフォーク状木器、叩き板状木器、鍬、スコップ状木器、砧、叩台等の木製農具が出土している。小川に投棄された状況で検出されており、居住地に隣接した地点であることを示している。出土した土器の内面に炭化米が付着したものもみられ、木製農具と共に、当地の初期農業を知る上で貴重な資料となっている。また、出土土器の中には、弥生時代後期の破片もみられ、その開始時期が遡る可能性を示している。さらに、出土土器の中には、脚部上位に櫛目の施された高杯、口縁が内弯気味に立つ壺等の異質の土器もみられる。東沢遺跡の北1kmに位置する雷電遺跡（15）は、東沢遺跡と同様な立地を示し、遺構は検出されていないが、甕、台付甕、高杯、器台等が一括出土している。また、中期の土器は、中条遺跡群の中島遺跡（16）、権現山遺跡（17）、常光院東遺跡（18）、女塚古墳群南周辺部（19）、光屋敷遺跡（20）等多くの遺跡から出土しており、前期の遺跡に比べて、遺跡数・範囲共に拡大している。

古墳時代後期に入ると遺跡数・範囲共に飛躍的に増大する。利根川の自然堤防上では、鬼高期の滑石工房址、真間期住居址、同期の土師器窯址の検出されている上敷面遺跡、鬼高期及び国分期の集落である妻沼町道ヶ谷戸遺跡（21）、鬼高期～国分期の130軒以上の住居址が検出されている鶴ノ森遺跡等の大規模な遺跡が発掘調査されている。櫛引台地の東端部では、鬼高期の住居址が7軒検出された三ヶ尻天王遺跡（22）、真間期～国分期の住居址が16軒検出されている三尻中学遺跡（23）、3次にわたる調査によって鬼高期～国分期の住居址49軒、柱列、

土坑、溝等の他中世の大規模墓域（土葬墓・火葬墓）の検出された樋の上遺跡（24）、鬼高期～国分期の住居址が50軒検出された上辻・下辻遺跡（25＝樋の上、上辻・下辻遺跡は櫛引台地の東縁に隣接する、荒川の自然堤防上に立地するが、台地東縁とのレベル差はほとんど無い）などがみられる。目を東の、利根川・荒川両河川の自然堤防上に転ずると、鬼高期～国分期に及ぶ住居址16軒、土師器窯址4基が検出された中島遺跡、真間期～国分期の住居址や、中世の土坑、井戸址の検出された常光院東遺跡、鬼高期～真間期の住居址、中世の土坑・井戸址居館址堀、火葬墓、蔵骨器等の検出された光屋敷遺跡等がみられる。これらの遺跡は、何れもが大規模であり、かつ、継続した集落址として特徴をもつ。このように、鬼高期以降台地縁辺部や自然堤防上に連続して大規模集落が形成され、当地域に後にみられる大規模な農業経営の基をつくり出していったと考えられる。

当地域に古墳が出現するのは5世紀後半から末の頃である。熊谷市中奈良の横塚山古墳（26）、今井の女塚1号墳（27）、上中条の鎧塚古墳（28）である。何れも自然堤防上に立地し、墳形は、帆立貝式前方後円墳である。横塚山古墳は、2次にわたる周溝部の調査によって、長軸40m前後、後円部径33m前後になるものと考えられている。周溝内からB種横刷毛目をもつ朝顔花型円筒埴輪が出土している。女塚1号墳は、長軸46m、後円部径36.8mを測り、墳丘と相似形の二重の周溝をもち、前方部中央付近に長方形の石組みが検出されている。後円部及び周溝外堤帯に横刷毛目整形を含む円筒埴輪が列を成して出土している。また前方部及び外堤の屈曲部からは形象埴輪が出土している。円筒埴輪列は、五本に一本の割合で朝顔花型を含んでいる。前方部から出土した形象埴輪は、武人、楽人等の人物埴輪を中心としている。外堤から出土した形象埴輪は、盾をもつ武人埴輪のみである。墳丘南くびれ部及び周溝中堤帯から土師器高杯が出土している。鎧塚古墳は、長軸43.8m、後円部径31.8mを測り、崩れた盾形を呈する周溝をもち、主体部はすでに消滅していた。後円部には円筒埴輪が一周し、くびれ部では、前方部へ向けて徐々に高い位置に配されていくようになる。形象埴輪は、後円部同列の内側に、人物の頭部と素足が三个体分検出されたのみである。後円部北東隅と南東隅の円筒埴輪列内側には、各々須恵器の高杯型器台、高杯、土師器の杯、高杯、罎（壺）の組み合わせから成る、墓前祭祀址が検出されている。女塚1号墳と鎧塚古墳は共に、周溝に榛名山二ヶ岳火山灰（FA）が堆積しており、FA降下前の構築であったことが知れる。また、両墳は約200m離れて位置し、時期・規模等ほとんど同様であるにもかかわらず、埴輪祭祀・土器祭祀に大きな差異をみせたり、埼玉古墳群の稲荷山古墳との関連性など、両墳の内包する問題には重要なものが多い。

発掘調査された古墳のうち、主体部に使用されている石材は、大別して二種類ある。16基の古墳が確認された三ヶ尻林遺跡（29）では全て河原石を使用した胴張りの横穴式石室である。うち4号墳（やねや塚古墳）は、葺石をもつ二段築成の円墳であり、テラス面から人物・大刀・馬等の形象埴輪や円筒埴輪が検出され、石室内からは、直刀、刀子、鉄鏃等の武器類、銅釧、耳環、ガラス玉、水晶切子玉等の装身具類、人骨等多量の遺物が出土している。林遺跡に隣接する三尻No80古墳（30）も河原石使用である。大字広瀬の薬師堂古墳（31）は、宮塚古墳を中心とした広瀬古墳群の一角を成し、河原石を使用した胴張りの横穴式石室を有する。銅釧、耳環、刀子、鉄鏃、埴輪片が出土している。上奈良の新ヶ谷戸1号墳（32）は河原石使用の胴張り型横穴式石室を有し、墳丘前面には葺石も認められた。テラスから前庭部にかけて須恵器細頸瓶、平瓶、杯、甗（栓付き）、土師器杯が出土している。中条古墳群中の女塚4号墳（33）は、河原石使用の舟形礫埴を有している。円筒埴輪列よりも低位で竪穴系主体部が検出された例である。以上が石室に荒川の河原石を使用している古墳であり、櫛引台地上あるいは、荒川の古流路が主体となる自然堤防上に分布する。妻沼町弥藤吾の王子古墳（34）は、すでに破壊を受けていたが、角閃石安山岩截石による横穴式石室が存在したと考えられている。熊谷市大塚の大塚古墳（35）は、側壁が五面加工の角閃石安山岩で切組積みされ、奥壁・天井が青石の巨岩で構築されている。胴張りプランをもつ奥室が現存している。奥室内から、小札、金装銅製柄、靱尻金具、金箔、棺釘、基壇上からは須恵器大甕・甕

が出土している。熊谷市肥塚の飯田軍蔵氏宅所在の古墳（36）は、四面加工の角閃石安山岩によって隅丸方形プランの石室が構築されている。これら角閃石安山岩使用の古墳は、利根川の自然堤防上あるいは、利根川と荒川の相剋地域の自然堤防上に位置している。また、肥塚の古塚古墳（37）では、凝灰岩質の石棺を有し、異質な要素を加えている。

古代から中世へ培われた技術・生産力は、当地域の地理的条件を味方にし、広大な農地をつくり出していった。別府条里跡（※1＝※印はおおよその中心を示す）、中条条里跡（※2）、佐谷田条里跡（※3）など広大な農地は、豊富な水量にささえられ、生産力をさらに高めていたものであろう。これらの水を祀る祭祀遺跡としては、西別府の湯殿神社遺跡（38）がある。別府沼とよばれる湧水地に楕形・馬形等の滑石製模造品を投入したと考えられている。

中世の武士団はこうした生産力を基盤に成立し、当地にも多くの居館を構えている。熊谷市内（第2図中）では、別府氏館址（39）、玉井陣屋址（40）、奈良氏館址（41）、成田氏館址（42）、中条氏館址（43）、中条常光居館址（44）、河上氏屋敷（45）、箱田館（46）、肥塚館（47）、揚井氏兵部裏屋敷（48）、石原氏御蔵場（49）、熊谷館（50）、瓶尻氏（黒沢氏）黒沢館（51）等がみられる。また玉井では常滑甕に入った古銭も発見されている（52）。

## 引用・参考文献

1. 昭和55年度埼玉埋蔵文化財調査事業団調査
2. 昭和57年度熊谷市教育委員会調査
4. 蛭間真一他「上敷面遺跡」『深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書』 深谷市教育委員会 1978
5. 増田逸郎「飯塚遺跡」『埼玉県土器集成4』 埼玉考古学会 1976
6. 荒川弘他「妻沼西南遺跡群Ⅰ」 妻沼町教育委員会 1981
7. 高山靖司「三ヶ尻上古遺跡」『埼玉県土器集成4』 埼玉考古学会 1976
8. 小川良祐他「池守・池上」『一般国道125号埋蔵文化財発掘調査報告書』 埼玉県教育委員会 1984
9. 宮昌之他「池上西」『埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第21集』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1983
10. 栗原文蔵「平戸遺跡」『埼玉県土器集成4』 埼玉考古学会 1976
11. 田部井功他「弥藤吾新田遺跡発掘調査報告書」『埼玉県遺跡調査会報告第29集』 埼玉県遺跡調査会 1976
12. 昭和55年度調査
13. 昭和49～51年 昭和54年度調査 12. 13については、妻沼教育委員会荒川弘氏に御教示いただいた。
14. 並木隆他「中条条里遺跡調査報告書Ⅰ」 熊谷市教育委員会 1978
15. 寺社下博「中条遺跡群」 熊谷市教育委員会 1984
16. 寺社下博「中条遺跡群・中島遺跡」 熊谷市教育委員会 1980
- 17・18. 寺社下博「中条遺跡群Ⅲ・権現山古墳・常光院東遺跡」 熊谷市教育委員会 1982
- 19・27・33. 寺社下博「めづか」 熊谷市教育委員会 1983
20. 寺社下博「中条遺跡群」 熊谷市教育委員会 1984
21. 6に同じ
22. 小久保徹他「三ヶ尻天王・三ヶ尻林（1）」『埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第23集』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1983
23. 寺社下博「三尻中学遺跡」『埼玉県埋蔵文化財調査年報』 埼玉県教育委員会 1980
24. 小川良祐他「県立熊谷西高校（樋ノ上遺跡）体育館予定の発掘調査及び校舎・管理棟・体育館予定地出土遺物の整理」『資料館報No.9』 埼玉県立さきたま資料館 1978
25. 金子正之「三尻遺跡群 上辻・下辻遺跡」 熊谷市教育委員会 1984
26. 増田逸郎他「横塚山古墳」 埼玉県遺跡調査会 1971 菅谷浩之「横塚山古墳一墳丘裾部の調査」 熊谷市遺跡調査会 1977
28. 寺社下博「鑑塚古墳」 熊谷市教育委員会 1981
29. 22に同じ
30. 寺社下博「三尻No.80古墳」『昭和54年度熊谷市埋蔵文化財調査報告書』 熊谷市教育委員会 1980
31. 「薬師堂古墳」『新編埼玉県史、資料編2』 埼玉県 1982
32. 利根川章彦他「新ヶ谷戸」『埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第9集』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1982
34. 「資料 王子古墳発掘調査」『妻沼町誌』 妻沼町 1977
35. 寺社下博「めづか」 熊谷市教育委員会 1983
36. 尾崎喜左雄「横穴式古墳の研究」 吉川弘文館 1966
38. 大場惣雄他「新発見の祭祀遺跡」『史迹と美術』第33-8号 1963
- 39～51. 「埼玉の館城跡」 埼玉県教育委員会 1968
52. 寺社下博「熊谷市玉井古銭」 熊谷市教育委員会 1980

### Ⅲ. 発掘調査の概要

東京電力送電線路東埼玉線および、これと交差する妻沼線の熊谷市内における鉄塔増強工事は、合計10ヶ所で実施されることとなり、遺跡の所在が確認された鉄塔No42、43、44および妻沼線No2は発掘調査、他は、遺跡の存在する可能性が高いとして、試掘調査を実施した。調査区の概要は、以下のとおりである。

第1調査区	鉄塔No46	大字上奈良字並木1035	地目畑
第2調査区	鉄塔No45	大字上奈良字並木907-1	地目畑
第3調査区	鉄塔No44	大字中奈良字二ッ道2174-1	地目畑
第4調査区	鉄塔No43	大字上奈良字土用ヶ谷戸272-1	地目畑
第5調査区	鉄塔No42	大字上奈良字天神下146-1	地目水田
第6調査区	妻沼線No2	大字上奈良字天神下158-1	地目水田
第7調査区	鉄塔No41	大字東別府字越生1310	地目水田
第8調査区	鉄塔No40	大字東別府字金塚1271	地目水田
第9調査区	鉄塔No39	大字東別府字浄心町1246-1	地目水田
第10調査区	鉄塔No38	大字西別府字戸井田114	地目水田

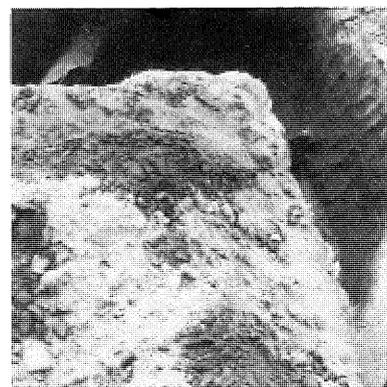
第1調査区は、奈良中学校の北に隣接した地に在って、周囲の水田面より50cm前後高く位置する。また、本区



Fig. 3 第1・2・3調査区位置図



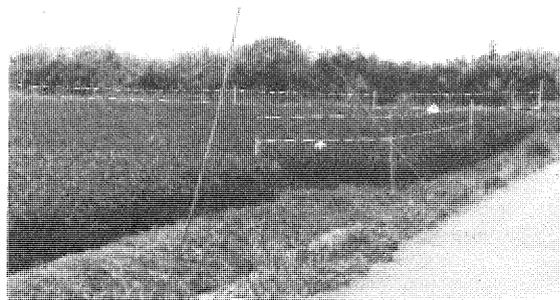
PL. 3 第1調査区遺物出土状況



PL. 4 第2調査区(南より)



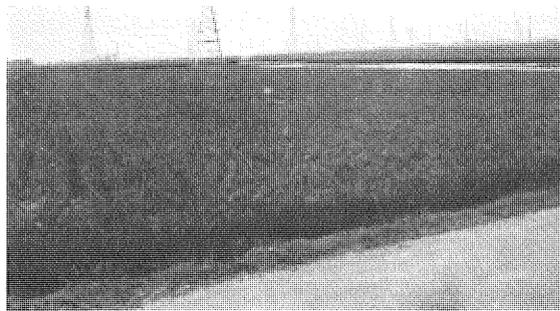
第1調査区



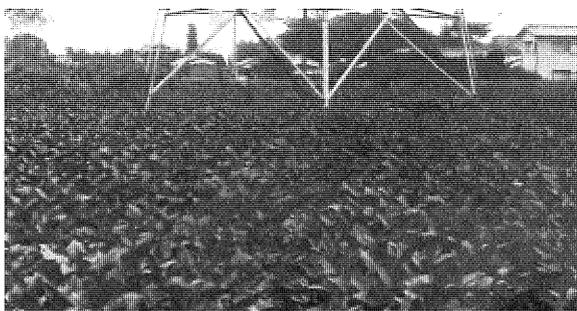
第6調査区



第2調査区



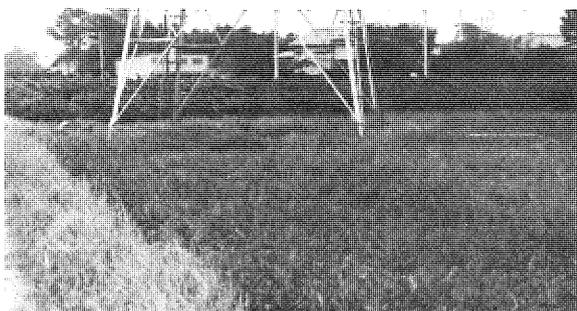
第7調査区



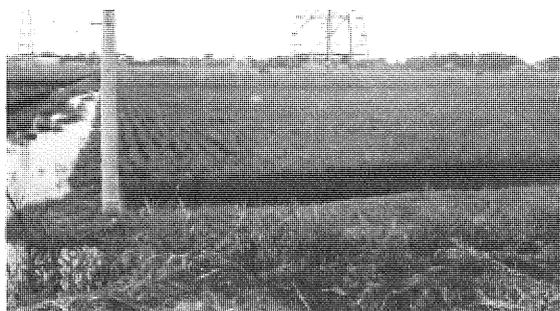
第3調査区



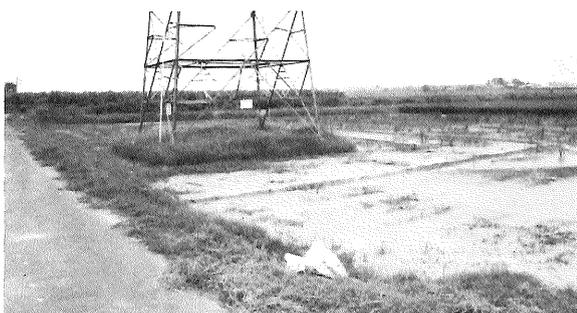
第8調査区



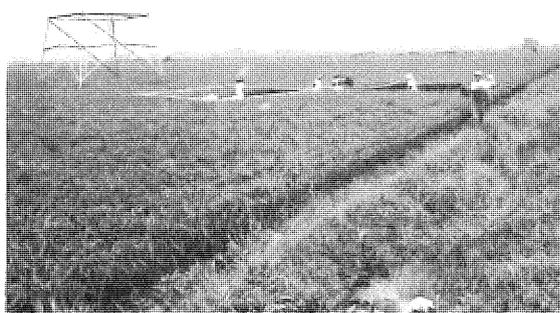
第4調査区



第9調査区



第5調査区



第10調査区

および周囲の同地形上の畑地から土師器片が散見されたところから、遺跡の存在する可能性が有り、試掘調査を実施したものである。土層は、表土・耕作土のみが粘土層であり、下位は礫および砂層のみである。礫層は厚く、しかも間に砂層を狭む為、崩れ易く、また全体に遺構の存在する可能性の無いところから、地表下120cmで調査を終了した。遺物は、礫層中より土師器杯の破片（第10図1-1）および、磨滅した土器片が3片出土したのみである。

第2調査区は、第1調査区の北西200mに在って、第1調査と同地形上に立地する。本区の東には小谷が北に開いている。本区は既設鉄塔建設の際掘削された部分が多く、詳細は不明である。わずかに残存した部分では、礫と粘土の混在層が地表下100cmまで観察されたが、遺物は全く検出されていない。

第3調査区は、第2調査区の北西200mに在って、第1・2調査区の立地面よりさらに一段高い。礫層検出面は、第1調査区とほぼ同一である。第1～第3調査区の礫層の検出状況を見ると、第2調査区で低く、第1・3調査区で高い。また、粘土層は、第2調査区で最も厚く、第3、第1調査区と薄くなる。遺物は、第3調査区ではかなり出土しているものの、第1、2調査区ではほとんどみられない。現標高は第3調査区が最も高い。以上の点からすると、礫層堆積時に第2調査区に小谷が形成され、後に粘土層が堆積したものの、第1調査区にはほとんどその堆積作用が及ばなかったものとみられる。この粘土層の堆積作用は北・西方向からのものであり、粘土の堆積した分西側で現標高が高くなっているものと理解される。

第4調査区は、第3調査区の北西370mに在って、第3調査区と同一地形上に立地する。本区の北および西は1m前後の段を成して低位水田面に連なる。本区は粘土を主体とした土層が地表下240cm前後まで堆積し、それ以下



には礫層が堆積している。遺物は調査区全域から満遍無く、礫面直上の二層から出土している。遺構は、全く検出していないものの、遺物の出土量、地形の状況から、当地の高位面上の遺跡（土用ヶ谷戸遺跡）の中心地の近くに位置するものと思われる。

第5調査区は、既設送電線路妻沼線の鉄塔を拡大し、妻沼線と交差する東埼玉線両線の送電線を一基の鉄塔で済ます為の増強工事に伴って調査されたものである。第6調査区は、この工事期間中、妻沼線送電線を仮に受ける鉄塔の建設地である。第5・6調査区共、現水田面であり低位であるが、第5調査区の北に隣接してすか様古墳（第4図※）があり、また、周辺に水田にも土器片が散見されることから調査することとなった。

第5・6調査区は、同一遺跡として10mの大グリッドを設定し、各調査区で必要に応じて小グリッドに細分する方法で調査を進めた。この結果、第5調査区では縦穴状

Fig. 4 第4・5・6調査区位置図

遺構1、南西から北東、もしくは東へ走る溝址1、第6調査区では、住店址5、竪穴状遺構3、土壇3、南西から北東走る溝址1を検出した。ただし、両調査区で検出された溝址は、掘り込み面、覆土共に大きく異なり、関連性は無い。

両区における礫層は、地表下240cm以上下位であり、粘土層が厚く堆積している。検出された各遺構は、この粘土層中に掘り込まれているが、第5調査区検出の溝址のように、底面が礫層に達しているものもある。また、第6調査区の下位粘土層中には、遺構に伴わないものの、完形もしくは、それに近い古墳時代前期の遺物を包含している土層もある。礫層は、遺構の下位基盤となっている安定したもの他、両区で検出された各々の溝址覆土中に多くみられる。溝址覆土中の礫層は、単独または砂層と混在するなど、礫自体の大きさと共に、種々の様相をみせている。

第6調査区における粘土層のうち、下位の土層は、北西から南東方へ傾斜している。この傾斜は、同調査区内で西側より東および南東側が顕著である。また、第5調査区では、溝址の北西側と南東側の基盤土層が異なり、北西側では第6調査区の層位と一致するが、南東側では異なってくる。遺物は、第6調査区では全体から出土しているが、第5調査区では、溝址内およびその北西側でのみ出土しており、溝址南東側ではほとんどみられない。これらのことから、第5、第6調査区は、天神下遺跡の東南端部に位置するものと考えられる。

このように、土用ヶ谷戸遺跡として第3・4調査区、天神下遺跡として第5・6調査区の調査を実施したのであるが、詳細については後述する。

第7・8・9・10調査区は、鉄塔の新設部であり、別府条里跡（第2図※1）に含まれている地域に相当する。事前調査では、水路等の想定地からはずれているため、試掘調査によって確認し、もし遺構が検出された場合には、発掘調査をおこなうこととした。

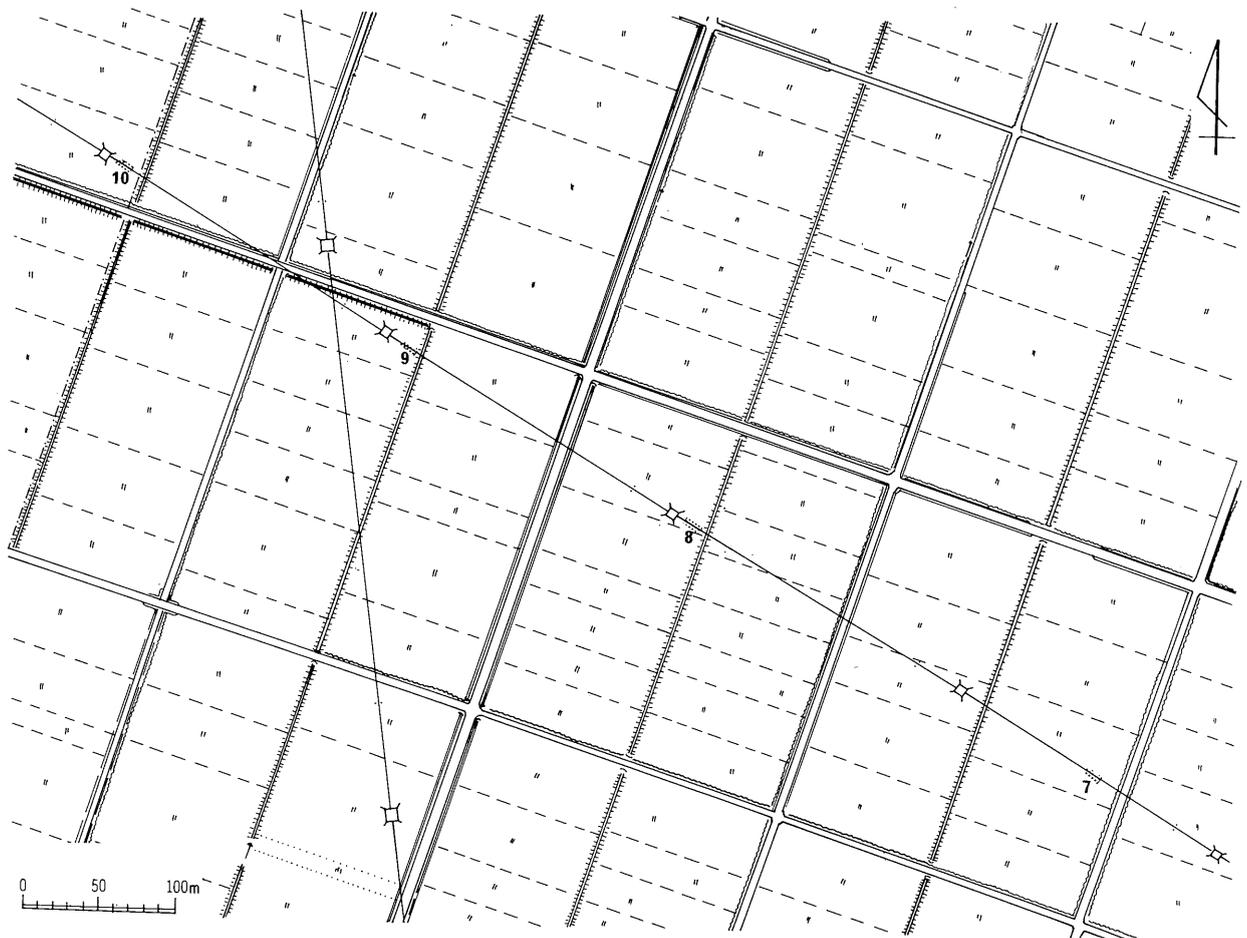


Fig. 5 第7・8・9・10調査区位置図

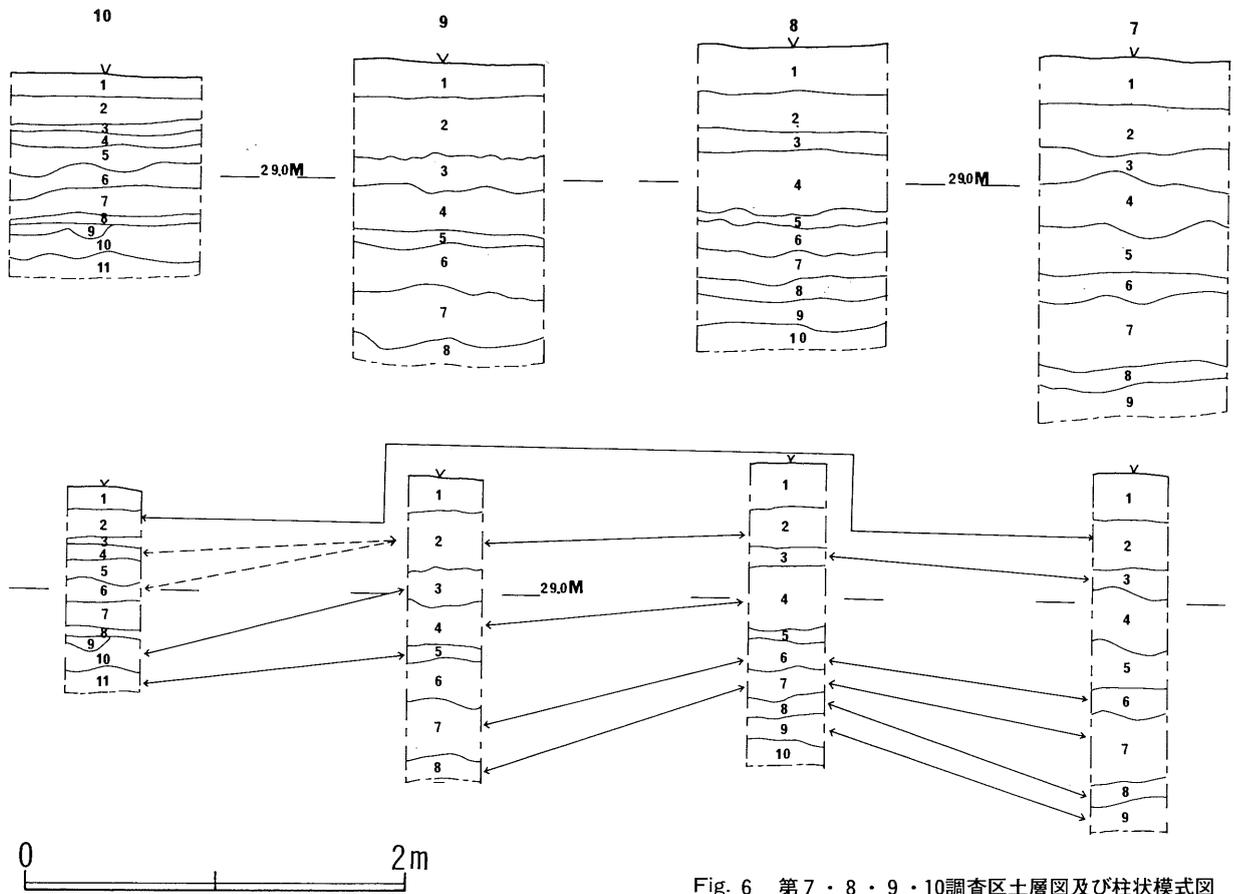


Fig. 6 第7・8・9・10調査区土層図及び柱状模式図

調査の結果、第7～9調査区では、各々の土層に変化はみられなかった。第10調査区では、一部落ち込みが検出されたものの、単独であり、掘り込み面が浅く、かつ、無遺物であるところから、対象外とした。

四ヶ所の調査区における土層は、各々独自の土層をはさみながらも、各調査区にまたがって堆積するものもみられ、複雑な土層堆積状況を醸し出している。以下、各調査区と共通する土層が多く堆積する第8調査区を中心に記すこととする。(第6図参照)

第8調査区2層（1層は、表土・耕作土として各区共同一。また、第8調査区2層は8-2というように略して記す）は、9-2、10-4・6と同一の様相を呈する、浅間A火山灰を含む黒褐色粘土層である。ただし、10-4・6は、黒色味が薄い。8-3は、7-3と同一の、明茶褐色粘土層、8-4は、9-4と同一の、炭化物砂粒を含む暗褐色粘土である。8-5は、細粒砂層である。8-6は、7-6、9-7と同一の、炭化物を含む黒灰色粘土層である。8-7は、7-7、9-8と同一の、酸化鉄を含みウグイス色を呈する粘土層である。8-8は、7-8と同一の、炭化物、酸化鉄を含む黒褐色粘土である。8-9は、7-9と同一の、酸化鉄を多量に含む褐色粘土である。8-10は、炭化物、極細粒砂を含む緑灰褐色粘土である。9-4上層の、9-3は10-10と同一で、酸化鉄、白色粒を含む黒褐色粘土である。下層の9-5は、10-11と同一の、暗褐色粘土層である。9区単独の6層は、酸化鉄、細粒砂を含む黒灰色粘土である。その他各区単独層は、7区で4（炭化物、酸化鉄を含む暗褐色粘土）、5（砂粒を含む灰褐色粘土）、10区で3（暗褐色粘土）、5（淡灰褐色粘土）、8（細粒砂を主体に粘土を含む）、7-9（8より粘土分が多量）である。また、7-2、10-2は同一の、淡灰褐色粘土層である。このように、共通する土層は、第8調査区でレベルが最も高くなり、両側に向けて低くなる状況を呈しており、旧地形の起伏を想定させるものである。また、上位層の第8～10調査区でのまとまりに、7区から1・2層が入り込む様相もみられるが、下位層では安定した堆積状況を呈し、堆積過程の差をみせている。

## IV. 遺構と遺物

### 1. 土用ヶ谷戸遺跡

#### (1) 第3調査区

No44鉄塔の拡大工事により、既設鉄塔部の北東・南東・南西の三面を調査したものである。現地表面は標高30.7m前後で平坦面を成しており、桑畑あるいは、豆畑として利用されている。

堆積土層（第7図右）は、上層から新（1）・旧（2）二層の耕作土が在り、何れも浅間A火山灰を含有している。第3層は、浅間A火山灰層を含有する茶褐色粘土層であり、上位二層の母層である。第4・5層は黒褐色土を主体とする土層であるが、第4層は1cm大の礫を多量に含有し、全体に淡色化している。第5層は2～3cm大の礫との混在する状況を呈し、黒色味が強い。第4層中から、須恵器壺形土器の口縁部（第10図3-1）が、第5層中から、磨滅した土師器片が出土している。第6層は、5～8cm大の礫を主体として、0.5mm粒の砂を含有する。第7層は、2mm粒の粗い砂層である。第8層は、2cm大の礫層である。第7・8層は、部分的に入る土層であり、土層図を作成した地点以外ではみられない。第9層は、2～4cm大の礫層であり、第11・12層は0.2mm以下の細粒砂層である（第11・12層は同一層）。両層に挟まれた第10層は、両層の混合した、2～4cmの礫と0.2mm以下の細粒砂の混在層である。第13層は細粒砂を含む黄茶褐色粘土であり、比較的安定した状況で全体に堆積している。第14層は、3～8cm大の礫と0.5mm粒の砂が混在する。第15層は、3mmの粗粒砂と3cm前後の礫が混在する。以上のように、本調査区では、第5層以上では粘土を主体とした土層であり、第6層以下では砂・礫層となる。遺物は、第5・6層から出土しているが、何れも小片であり、磨滅したものが多い。しかし、調査区内から満遍無く出土しており、一応、土用ヶ谷戸遺跡内における遺物出土の一つのあり方と理解される。

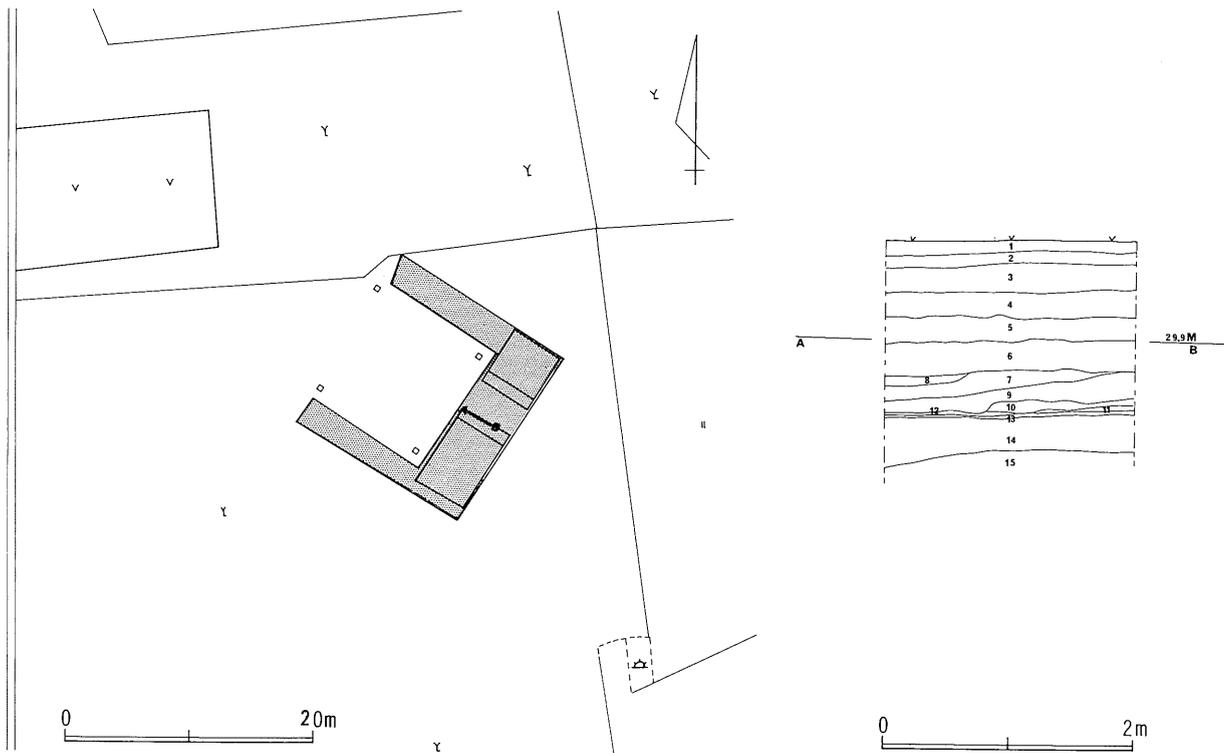


Fig. 7 第3調査区区域図及び土層図



第3 調査区微層平面



第3 調査区土層堆積状況

(2) 第4調査区

No43鉄塔の拡大工事に伴い、既設鉄塔部の西側を調査したものである。現地表面は、標高32m 前後を測り、以前は桑畑として利用されていたものの、現在は荒地となっている。

調査区は、3×12mの範囲に設定し、土層を一層毎剥いでいくこととした。土層は、地表下240cmまでに表土を入れて16層確認された。最上層は、表土・耕作土である。第1・2層は、淡黄褐色粘土層であり、第1層には浅間A火山灰が含まれている。第3・4・5層は、茶褐色粘土層であり、下位層ほど色調が濃い。また、第5層は、細砂礫をわずかに含有している。第6層は、黒褐色粘土であり、白色細粒を含有している。第7・8・9・10層は、細粒砂を含有する茶褐色粘土層であり、下位層ほど色調が濃い。また、第7層は多量の、第8層はわずかの酸化鉄を含む。第11・12・13層は、砂・小礫を含む暗褐色粘土層であり、砂・礫の量は、下位層ほど少ない。また、色調は、下位層ほど明るい。第14層は、粘土を含む1～2mm粒の砂層であり、黒褐色を呈する。第15層は、2mm粒の砂と5mm～1cm大の礫の混在層であり、黒褐色を呈する。第16・17層は、一部にレンズ状に堆積している土層である。第16層は、第13層とほぼ同一の様相を呈し、砂・小礫を含む暗褐色粘土層である。第17層は、第5層とほぼ同一の様相を呈する、細砂礫をわずかに含む茶褐色粘土層である。第15層の下位層は、5～8cm大の礫層である。レンズ状に入る第16・17層以外の土層は、ほぼ平坦に堆積するものの、第13層は、北側で下に厚く堆積する様相を呈している。

遺物は、この第13層に含有されるものが多いが、第12層からも検出されている(13・21等)。全て破片であるが、大片が多い。また、上のものほど磨滅したものが多い。遺構は検出されなかったものの、遺物の出土量も多く、土用ヶ谷戸遺跡の中心部に近い調査区と思われる。

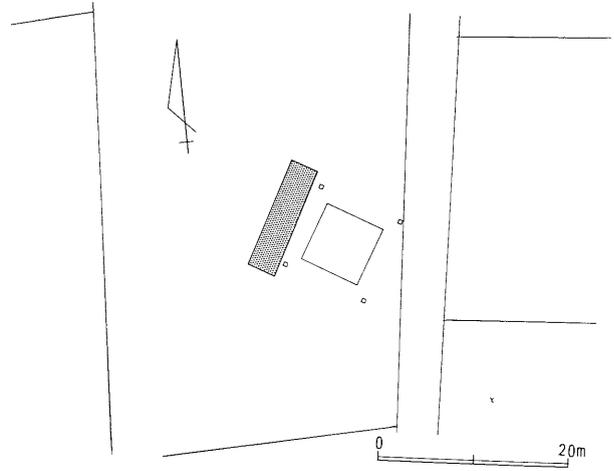


Fig. 8 第4調査区区域図

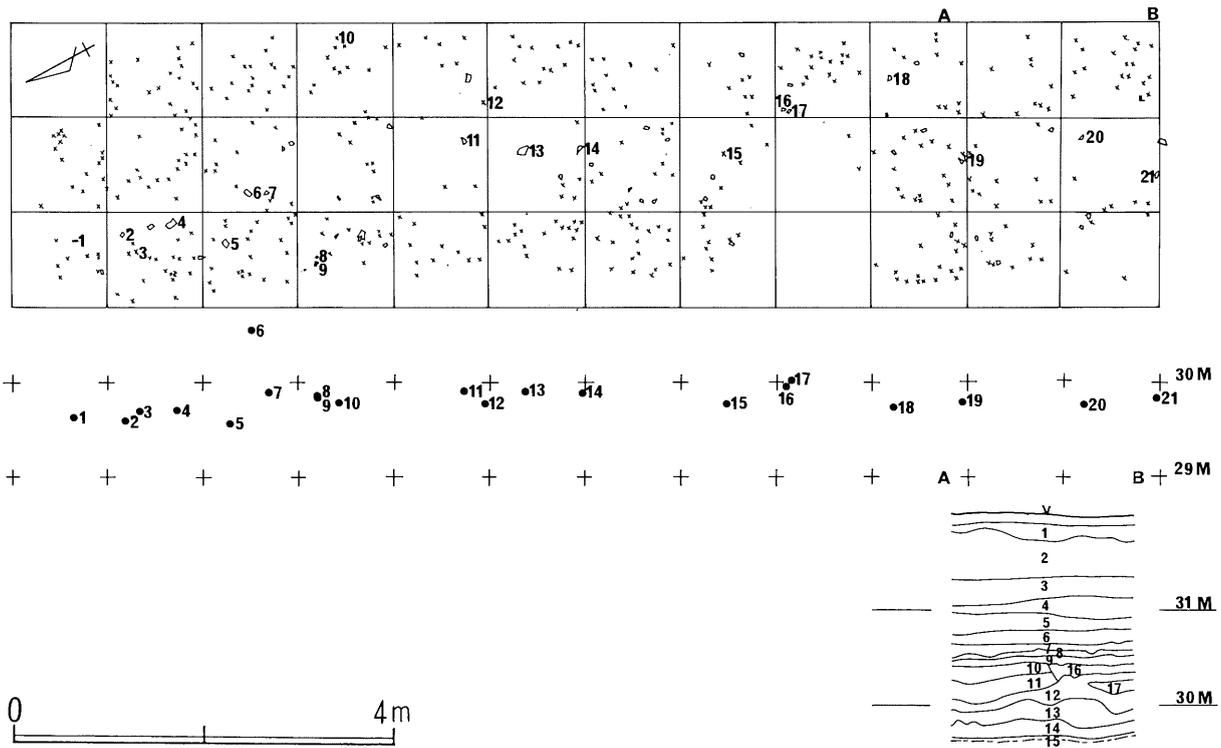
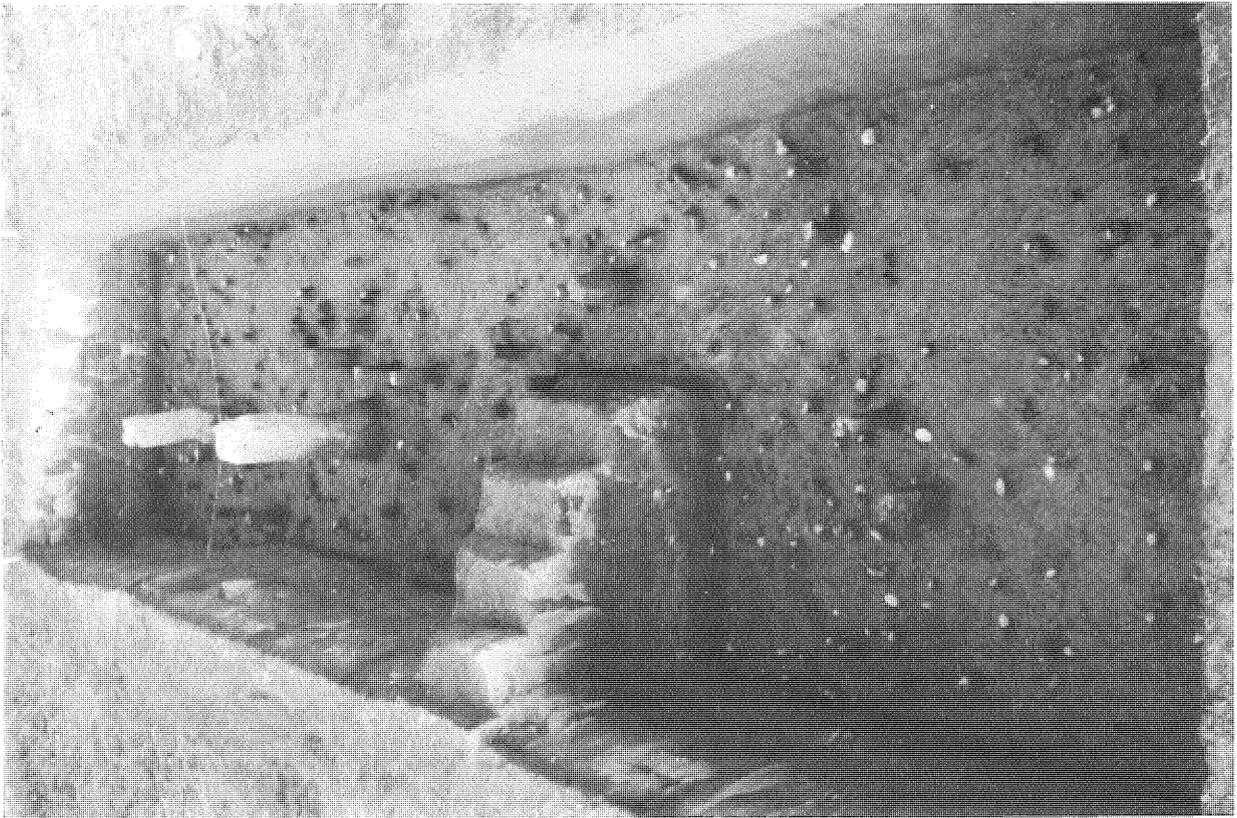


Fig. 9 第4調査区遺物出土状況及び土層図



第4調査区全景(南より)



第4調査区遺物出土状況

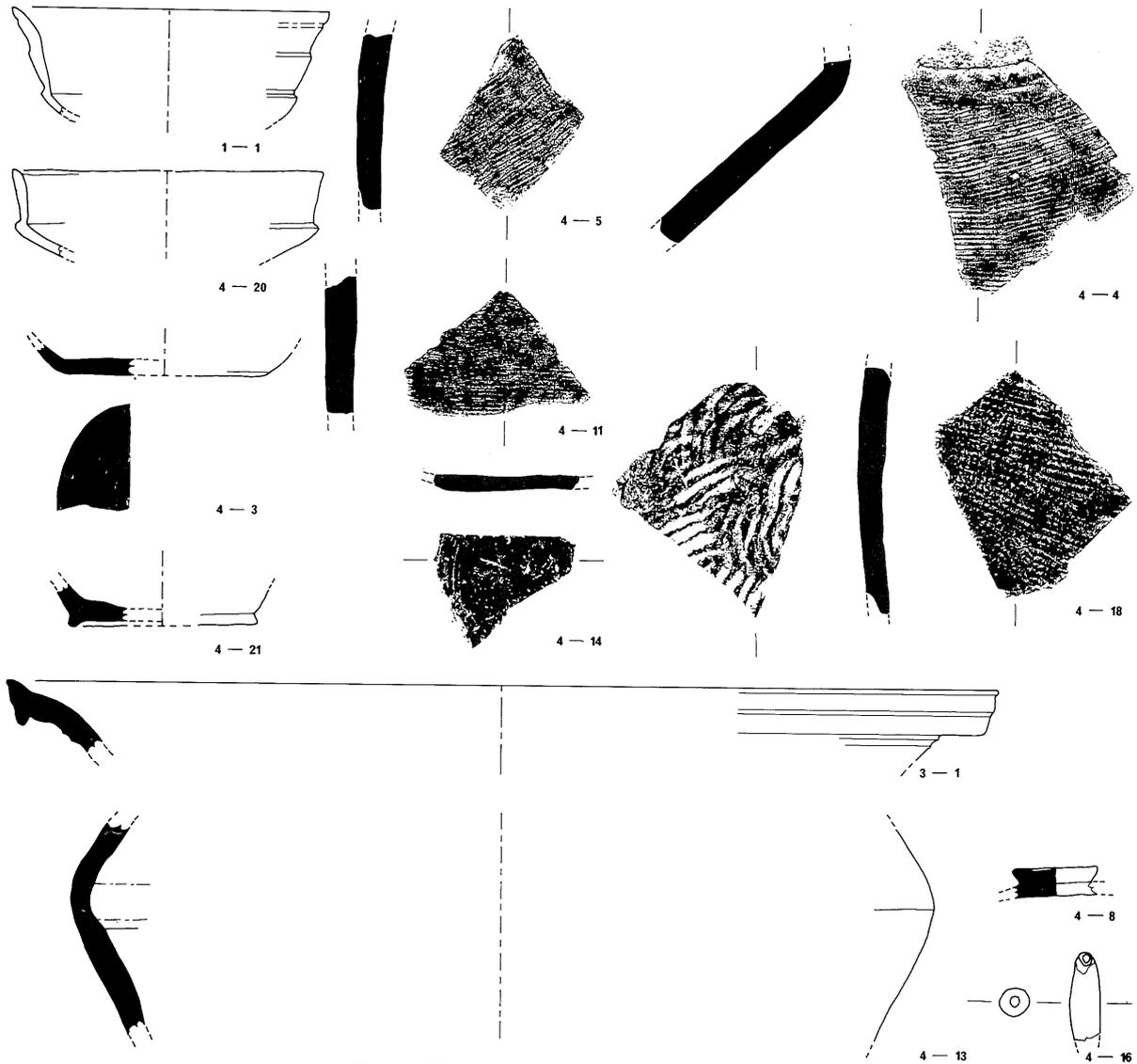


Fig. 10 第1・2・3・4調査区出土遺物実測図

#### 第1～4調査区出土遺物

##### 土師器杯（1-1、4-20）

1-1は、体部が浅く、深い口縁部が大きく外反する。口縁部は中厚となり、外面に横ナデによる二段の明瞭な稜をもつ。胎土は細かく、淡茶褐色を呈する。4-20は、体部と口縁部がほぼ同高であり、やや外傾する。口唇部付近が肥厚し、内面に受状の段をもつ。口縁部横ナデ、体部内面ナデ、外面ケズリ。胎土は細かく明茶褐色。

##### 須恵器杯（4-3、14、21）

3は、底面だけに右回転のヘラ削りを施している。14は、糸切りの後、底面及び体部下端にヘラ削りを加えている。胎土は、両者共密であり、14はわずかに白色針状物質を含む。色調は、3が淡青灰色、14が白けた灰色。21は、磨滅が激しいが、貼り付け高台をもつ。胎土は粗く、黒色粒を多量に含み気孔も多い。色調は、灰白色。

##### 須恵器甕（3-1、4-4、5、11、13、18）

3-1は口縁部、4-4は頸～肩部、他は胴部である。4-13は、外面黒小豆色、3-1は黒ずんだ灰色、4-18は白けた灰色、他は青灰色を呈する。4-18内面にのみ当目痕がみられ、他はナデによる。胎土は4-13、18が粗いものの、他は比較的細かい。

その他、4-8は須恵器蓋である。淡い小豆色を呈し、胎土は粗い。4-16は土錘である。

## 2. 天神下遺跡 (第5・6調査区)

天神下遺跡は、東京電力送電線の妻沼線と、東埼玉線の交差点である第5・6調査区の調査によって内容の一部が判明したものであり、調査前は、北に隣接したすか様古墳周辺の遺物散布地とされていたものである。

調査は、第5・6調査区における遺物の分布、遺構の存在・性格、旧地形の状況等の究明を目的とし、両調査区にまたがったグリッドを設定(10×10m、北東端を0-0とし、北西へ40m、西南へ50mとした。グリッドの呼称は、北東端の0-0ポイントからの距離で表わし、0-0ポイントから北西へ20m、南東へ30mのポイント、20-30のように、北西側を先に示した)した。第5調査区は10-10ポイント、第6調査区は30-40ポイントを中心とする位置に当る。

遺跡は、現水田面下に在り、西側には桑畑となっている高台が隣接する。この高台は大部分礫混在層であり、

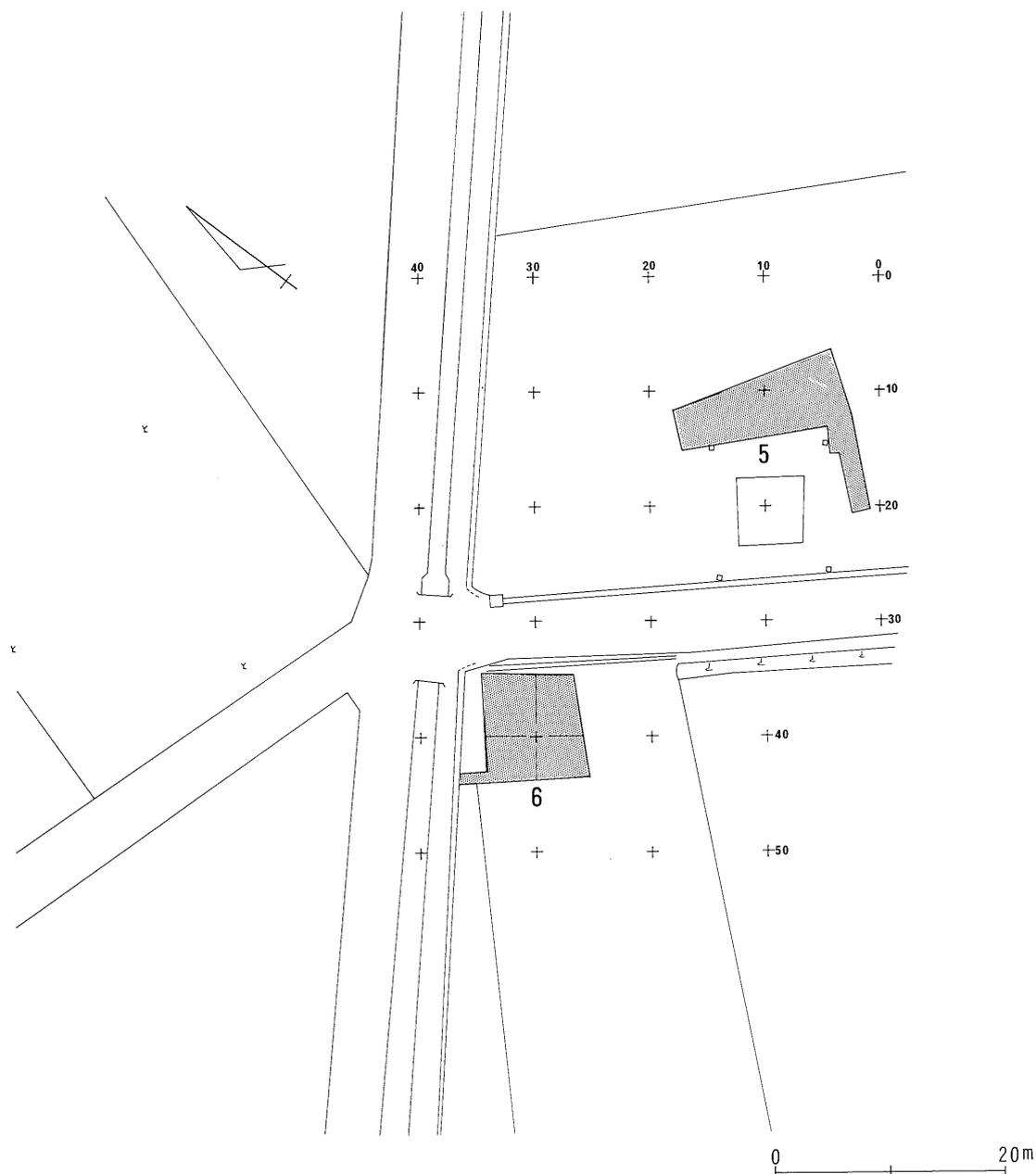


Fig. 11 第5図5・6調査区区域図

表採及び、既掘部分の観察でも遺物は検出されていない。遺跡は、現水田面の低地帯に在って、現桑畑等の高台には存在しないか、低地帯の遺構検出面と同レベルまで下る位置に存在すると考えられる。

(1) 第5調査区

a. 溝址

第5調査区のほぼ全域に広がりを持ち、上端幅9.0~9.5mを測る。下位で平坦面を持ち、中央やや東に寄って一段下がる。平坦面の幅約5m、底面細溝上端幅約1.30mを測る。上端から平坦面までの深さ0.8m、上端から細溝底までの深さ1.10mを測る。北東から南西へ伸び、第5調査区の10—10ポイントを通る溝の中心線は、第6調査区の東・20—50ポイント付近へ向かうものと考えられる。

溝上面に平坦に堆積する土層は、粘土層のみであるが、溝覆土及び基盤層には砂・礫が多量に含まれる。1~11, 60, 63, 64, 71, 74, 77, 78層は粘土層である。このうち2層にはTA粒が、8・9層には白色細粒が含まれる(8層に多)。色調は、8・9層が黒褐色、74・7・6層が暗褐色、11・78・1・63・60・10・64層が茶褐色、71・2・3・5・4層が淡褐色を呈する(いずれも先に記した土層ほど色調は濃い)。32・34・37・45・46・47・48・51層は、茶褐色シルト層である。

16・19・20・22・23・24・25・27・33・55・56・58・59・72・79・80層は、砂礫層である。層を構成する砂礫粒は、55層が最も大粒であり、5mm大を中心に1mmから1cm大までの粒を含む。以後72・24・80・56と順次小粒となり、56層は2mm大の礫を中心とする。56層とほぼ同一の様相は、23・59・19層でもみられる。79層は、1mm大の砂粒となり、砂礫と砂の中間形態を示す。22・58・27・20・16・25の順で砂粒は細くなり、25層は極細粒

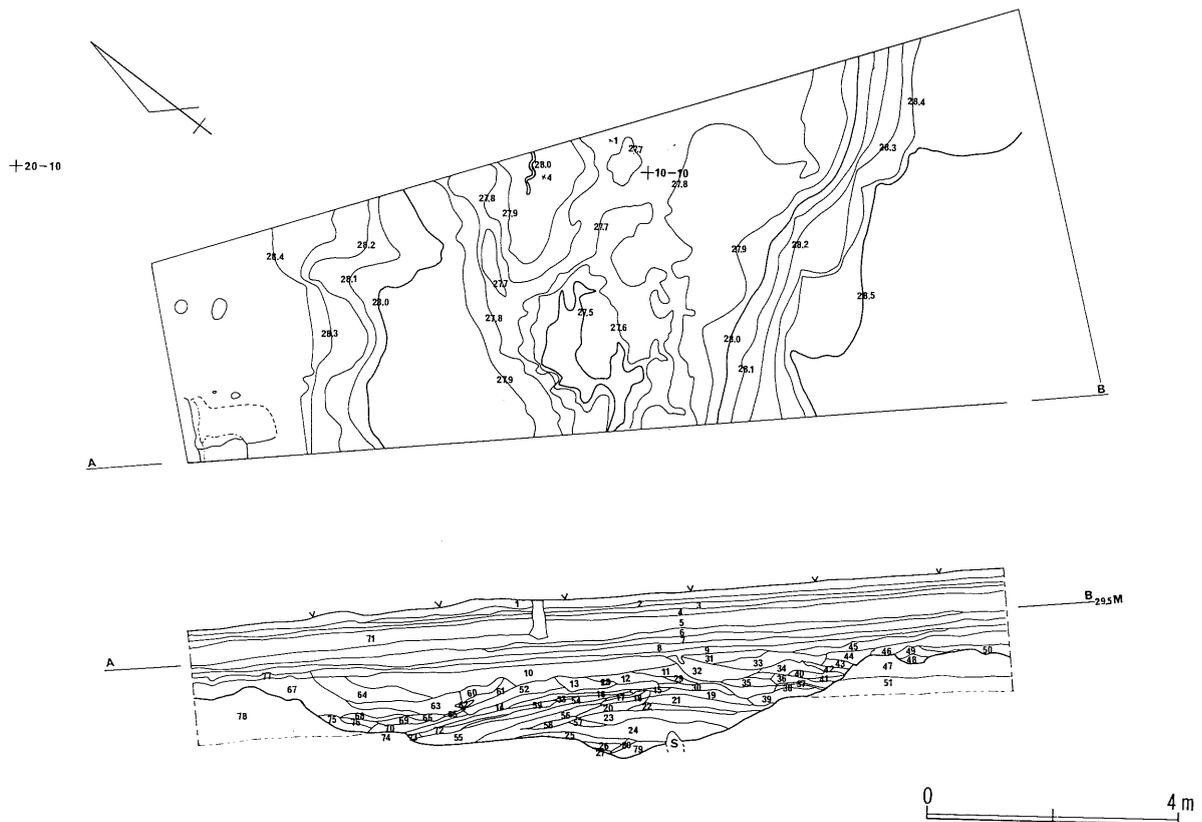


Fig. 12 第5調査区遺構配置図及び土層図



第5調査区溝址



同土層堆積状況

となる。

粘土層と砂礫層の間には、両者の中間形態を示す土層が堆積する。

①粘土に砂礫を含有する土層

15層—茶褐色粘土に砂粒を主体として3mm～1cmの礫を含む。

28層—暗褐色粘土に3mm大の礫を含有

40層—茶褐色粘土に砂粒を主体として3mm大の礫を含む。

41層—暗褐色粘土に3mm大の礫を含有

62層—茶褐色粘土に砂粒を主体として3mm大の礫を含む。

70層—茶褐色粘土に3mm大の礫を含む。

②粘土に細粒砂を含有する土層

54・68層—黒褐色粘土（先に記した土層ほど色調は濃い。以下同一）

12・14層—暗褐色粘土

42・50・52・49・61・65層—茶褐色粘土

29・13・31・67・30層—淡褐色粘土

③砂礫に粘土を含有する土層

17・18・21・26・33・35・36・38・39・43・44・53・57・66・69・73・75・76層。いずれも1～3mm大の砂礫に褐色粘土を含有している。このうち33・38・53層は、砂礫に酸化した淡褐色粘土を含有している。

b. 竪穴

本調査区の西隅に位置する。北～東の大半を溝によって削除され、西壁と、それに接する床面の一部しか残存していない。

床面上には、ほぼ全面に焼土・炭化材が認められる。

北東から南西へ伸びる竪穴の西壁は、直角に折れて南東へ連続するが、西壁の延長線上にも連続し、一段高い平坦面を有している。上段の平坦面上にも焼土・炭化材がみられ、上下二段の床面をもつと考えられる。二段の高低差は約20cmである。

竪穴は、78層やや緑がかった茶褐色粘土層中に掘込み面がみられ、覆土も同一層が堆積している。

床面の削り取られた北東部には、4本のピットがみ

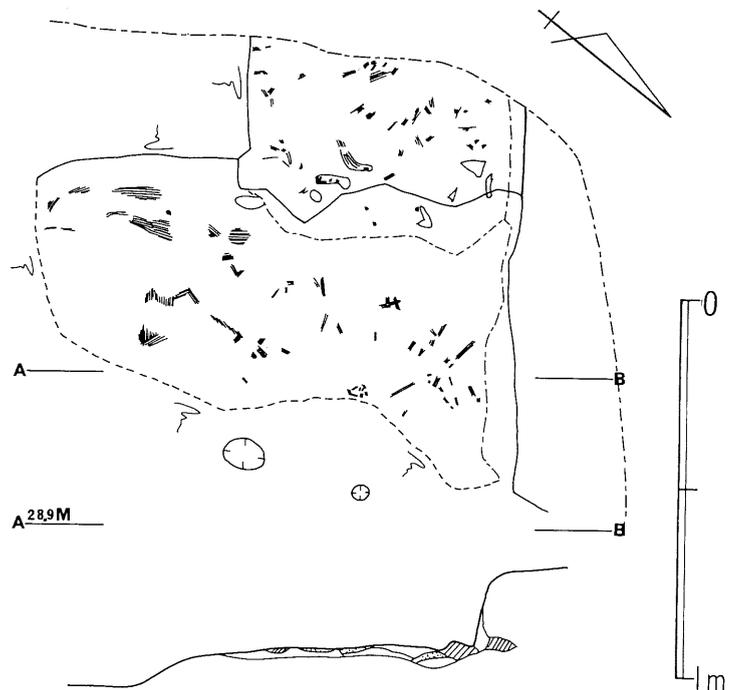
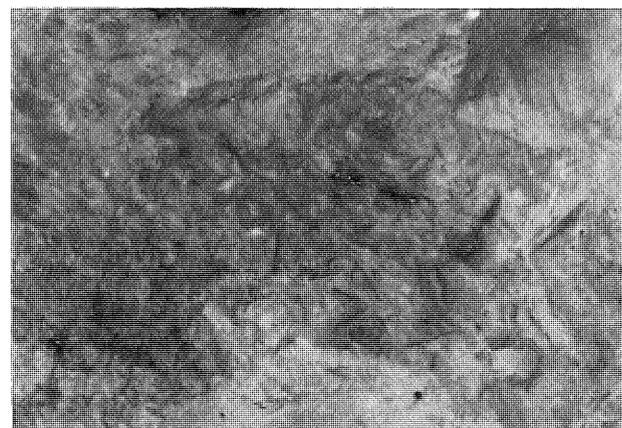


Fig. 13 第5調査区竪穴炭化材出土状況



PL. 9 第5調査区竪穴（上）炭化材出土状況（下）

られるが、いずれも覆土が異なり、本址との関連性は無いものと考えられる。

本址から出土した遺物は、沈線による、細斜格子目文をもつ壺の破片 (Fig. 14—10) のみである。

### c. 第5調査区出土遺物

#### 須恵器杯 (Fig. 14—1～4, PL10)

1は、推定口径15.2cm、底径8.3cm、高さ3.6cmを計る。底部は回転糸切りによる中央部のくぼみがみられるものの、ほぼ平底であり、下位に脹らみをもつ体部から、肥厚して外反する口縁に至る。ロクロ整形、右回転。体部外面下位には、横または斜のナデが加えられている。底部内面には、「東」字の墨書が施されている。胎土は粗く、多量の軟質黒色粒を含み、灰色を呈する。全体の $\frac{1}{4}$ 残存。

2は、推定口径12.7cm、推定底径7.0cm、高さ4.0cmを計る。回転糸切り底から、上位脹らみをもつ体部へ移行する。口縁は、肥厚し外反する。ロクロ整形、胎土は粗く、黒色粒を含む。淡黄色を滞びた灰褐色を呈する。 $\frac{3}{4}$ 残存。

3は須恵器皿である。推定口径15.2cm、底径6.4cm、高さ1.9cmを計る。上底状を呈する回転糸切り底から、直線的に外傾する体部へ移行し、口縁は大きく外反する。ロクロ整形、右回転。胎土は粗く、黒色粒を含み、灰白色を呈する。

4は、口縁部を欠いており、底径のみ推定されるにすぎない。推定底径8.5cmを計る。底部はヘラ削りされており、体部下端のナデが一部連続している。ロクロ整形。胎土はやや粗く、白色針状物質を含む。内面青灰色、外面黒灰色を呈する。

#### 土師器器台 (Fig. 14—5)

推定口径7.3cm、推定接合部括れ径3.0cmを計る。脚部・台部共にゆるやかに外反し、受部は内弯気味に直立する。脚部外面は縦のミガキ、内面は縦あるいは斜のナデツケ、台部外面は縦のミガキ、内面は横のミガキ、受部は横ナデが各々施されている。脚部の円孔は外面から穿たれ、端部はケズリで整形されている。胎土はやや粗く、脚部内面が黄褐色の他は全面赤褐色、一部朱色を呈する。

#### 土師器壺 (Fig. 14—6. 7)

6は、推定口径12.6cm。頸部は直立し、口縁は受け口状を呈する。内面は接合痕を残す。胎土は砂を多く含む。淡赤褐色を呈する。肩から上位の一部のみ残存。

7は、推定底径8.2cm。外面は刷毛目調整の後丁寧なナデ。内面は横あるいは斜の刷毛目。外面赤褐色、内面吸炭部黒褐色、他は黒ずんだ黄褐色を呈する。底部の $\frac{1}{4}$ 残存。

#### 土師器甕 (Fig. 14—8)

8は、推定口径15.9cm。口縁部横ナデ、胴部外面縦のナデ、内面横のナデ、内面に接合痕がわずかに残る。内面黒ずんだ黄白色、外面は二次火熱を受け、赤褐色を呈する。砂礫を多量に含む粗い。口縁の $\frac{1}{4}$ 残存。

#### その他 (Fig. 14—9. 10. 11)

9は、甕の胴部破片である。外面に20cmの間に20本の刷毛目を持ち、内面はナデが施される。外面淡茶褐色、芯朱色、内面吸炭して黒色を呈する。胎土は粗い。

10は、壺の肩部破片である。外面はヘラ描き沈線によって格子目がつくり出され、朱塗されている。内面はナデが施される。胎土は粗いが器面調整がていねいにされている。全体に赤褐色を呈する。

11は、土錘である。胎土は粗く、淡赤褐色を呈する。

1～9は溝底部、10は竪穴内、11は第10層中よりの出土である。

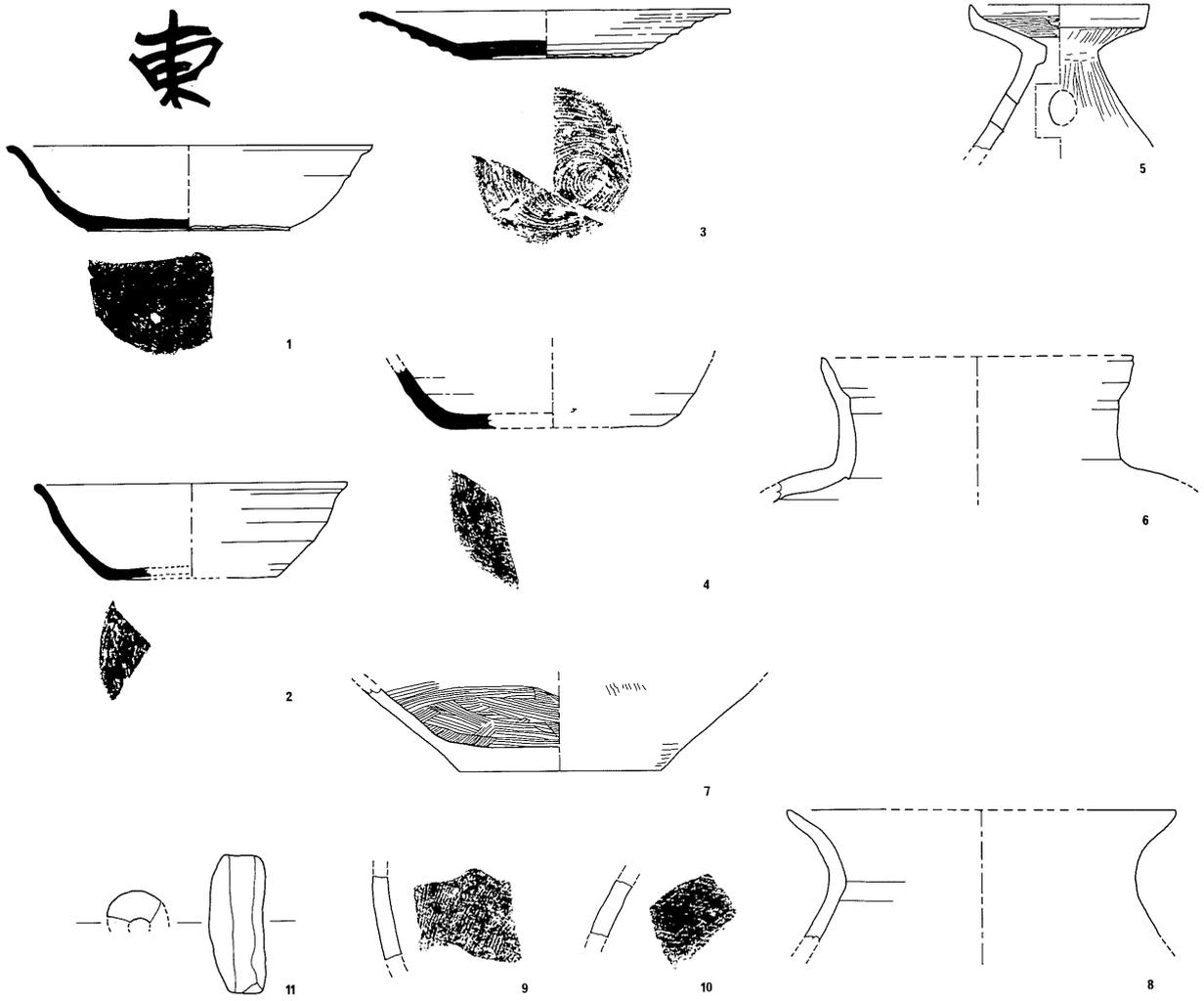
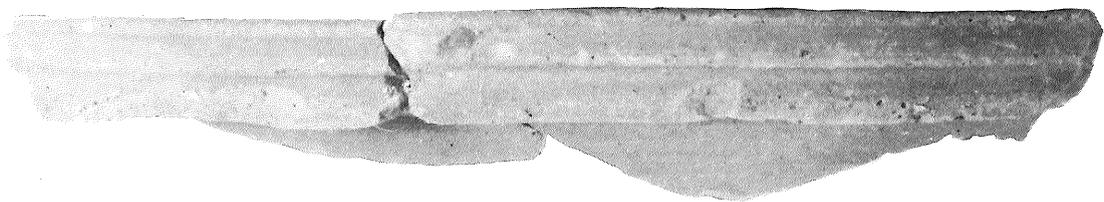
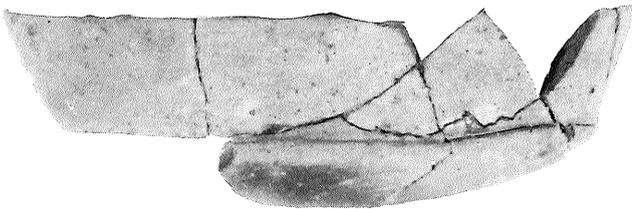
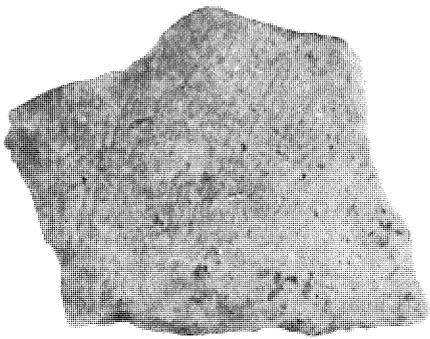
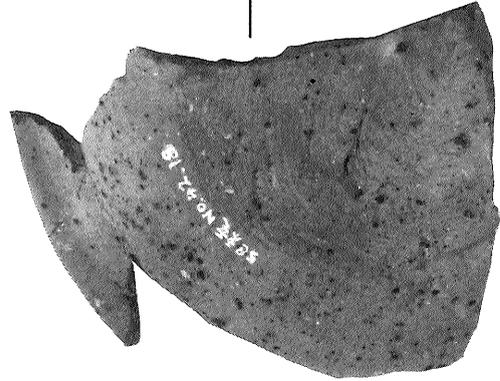
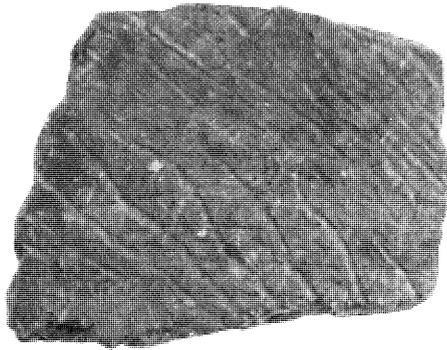
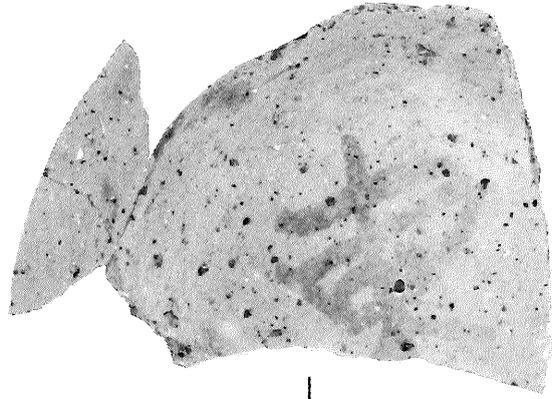
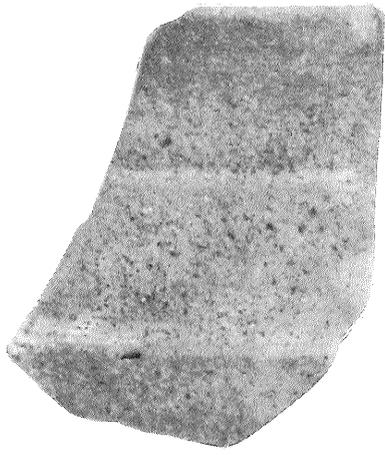


Fig. 14 第5調査区出土遺物実測図



(2) 第6調査区

本調査区は、本来10×10mの範囲が対象であったが、西を流れる水路を破壊する恐れが生じた為、8×9mの変則的な形となったものである。その為、南西隅にトレンチを入れ、西側の状況を調査することにした。

調査は、堆積土層の複雑さが予想されたところから、5・6調査区全体の大グリッド、30—40ポイントを中心として、2×2mの小グリッドを設定して実施した。なおかつ、各小グリッドの西・南辺に20cm幅のトレンチを入れ、土層を確認しつつ調査を進行していった。

その結果、住居址5基、竪穴3基、土坑3基、溝1址が検出された。また、遺構構築土層より下位層から遺物包含層が検出され、遺構確認の精査をしたものの、遺構は検出されるに至らなかった。

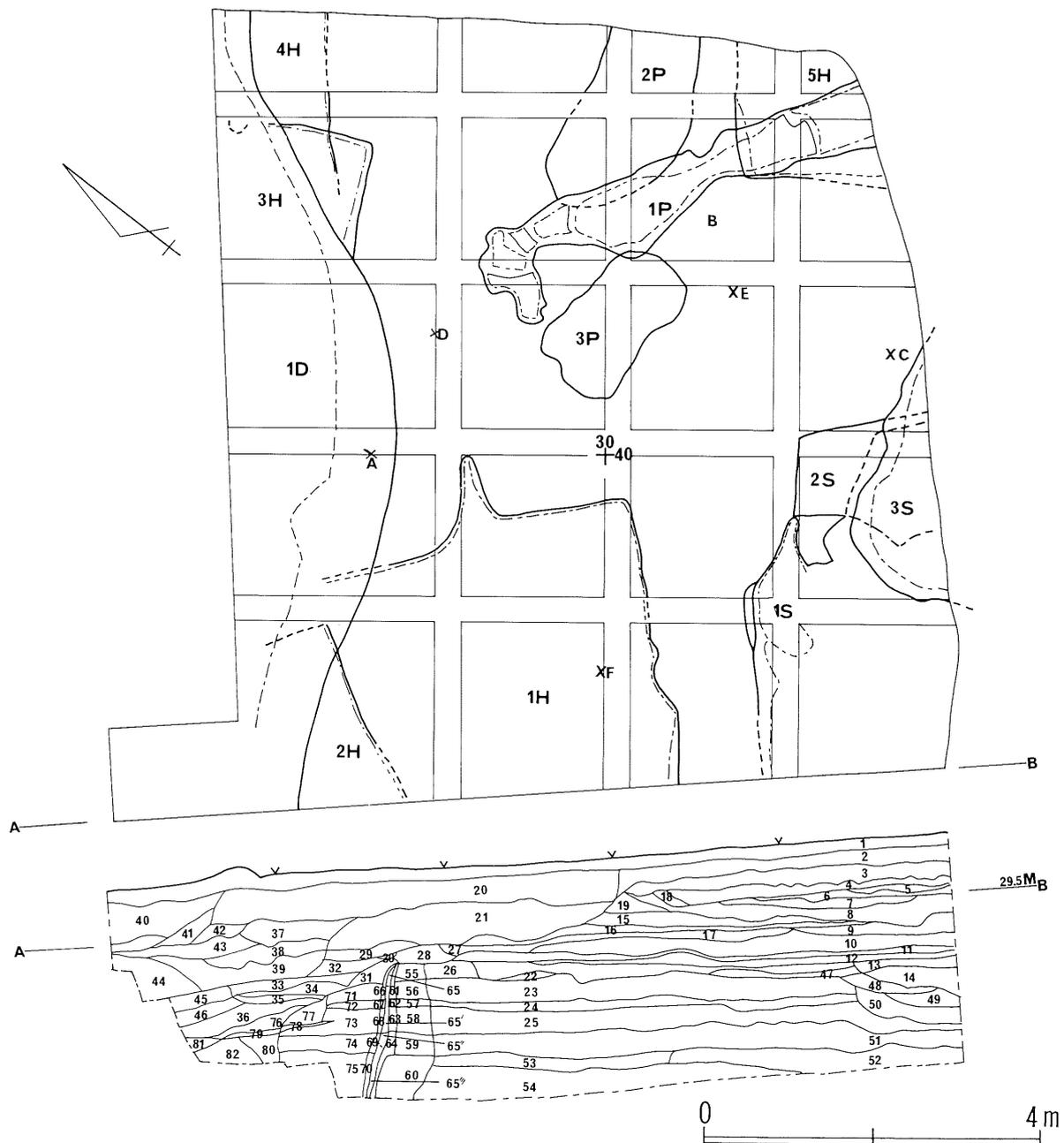


Fig. 15 第6調査区遺構配置図及び土層図

土層 本調査区の堆積土層は、粘土・シルト（両層共砂分が含まれているが、砂分 $\frac{1}{2}$ 以上をシルトとした）・砂礫層が相克する。

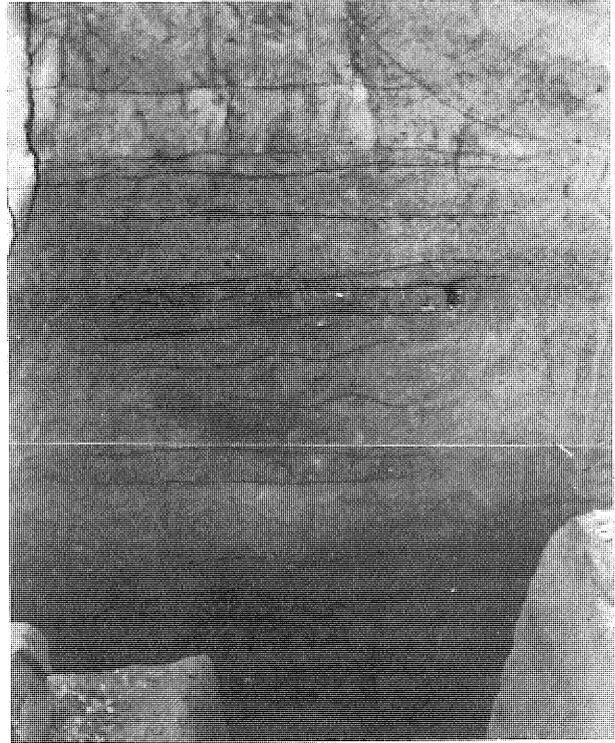
1・2・3・4・8・9・10・12・13・14・15・22・23・24・26・27・47・48・51・52・54・55・56・57・59・62・63・64・66・67・68・69・71・73・74・75・78・81・82層が粘土層である。1層表土耕作土、2層TA含有淡褐色、3・4層灰褐色（4は細粒砂含）8層淡茶褐色、9層茶褐色、10層細砂含灰褐色、12層暗褐色、13層黒褐色、14層暗褐色、15層淡褐色、22層灰褐色、23・24層暗灰茶色、26層灰茶色、27層暗茶褐色、47層細粒砂含暗褐色、48層灰褐色、51層灰ウグイス色、52層灰茶褐色、54層暗褐色、55層灰褐色、56層ウグイス灰色、57層灰褐色、59・62層灰茶褐色、63層淡灰茶褐色、64層砂含灰茶褐色、66層65砂を多量に含む灰褐色、67層65砂を含暗褐色、68層65砂を含黒褐色、69層黒褐色、71層細砂粒含黒褐色、73層黒褐色、74層細砂粒含黒褐色、75層暗褐色、78層暗褐色、80・82層暗茶褐色を呈する。このうち、26・55層には多量の鉄分、12・13・14・24・27・48層には炭化物を含有する。このうち、24層には特に大量に含まれ、褐色を呈する。また12層には焼土粒が含有されている。

5・32・35・36・44・65層は細粒の純砂層である。5層暗褐色、32層灰褐色、35層灰ウグイス色、36層灰褐色、44層灰褐色、65層は茶褐色を呈し、下位ほど色調が濃くなる。このうち5・35・44・65層は1mm以下他は1mm大のものまで含まれる。

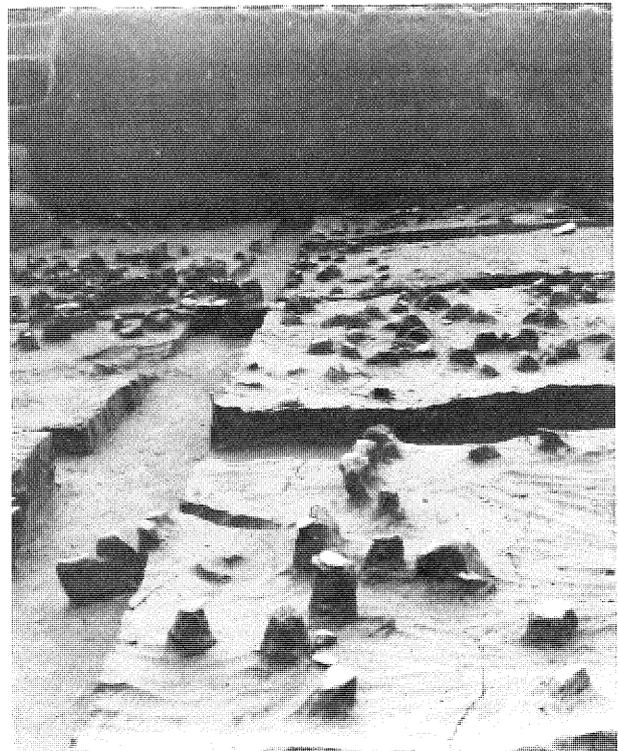
33・34・38・43・45・46・81層は砂礫混在層である。他は全てシルト層である。6・11・17層は淡褐色、7層茶褐色、16・19・39・49・50・61層灰褐色、18層淡茶褐色、20層暗茶褐色、21・41・42・72層暗褐色、25層暗灰茶色、28・29層灰ウグイス色、30・31・58層ウグイス灰色、37・40・76層灰色、53・60・77層灰茶褐色、70層黒褐色を示す。このうち、28層には鉄分、30・41層には植物体、49層には炭化物、40・41層には小礫を含む。

79層は炭化物の純層である。

西側溝内覆土を除いて、11層淡褐色シルト層を境に



第6調査区南壁土層堆積状況



第6調査区遺物出土状況

して上層は淡く、灰褐色を主体とし、下層は濃い暗褐色を主体とするようになる。

遺物は各遺構覆土中に含有されているが、特に、12・13層中に多い、遺構覆土を除いての遺物包含最下層は24層である。

15層以下の各層は、2mに10cmの高低差をもって、西から東へ低くなっている。

a. 1号住居址

**位置** 調査区の南西部に位置し、西側で2号住居址および1号溝と重複している。また、南側は調査区域外へのびていて形態は不明であるが、東隅からの両辺をみると、方形を呈するものと思われる。主軸方位はN-42°-Eを示す。床面は、凹凸がはげしく、不安定である。床面上にピットが二ヶ所検出されている。北ピットは、平面瓢箪形を成すように径10cmと16cmの二つのピットが連続したものであり、深さはいずれも30cmを計る。南西ピットは、径25cmほどで円形を呈するが、深さはほとんど無く5~10cmほどである。

北壁には山形の張り出し部がみられ、張り出し部および、竪穴内前面に焼土・炭化材が散在している。しかしながら、焼土が面として認められるのは一部（実側図中螺線部）のみであり、焼土自体も弱いものである。張り出し部断面は、中央で異なり、奥部はほぼ水平、前部は緩斜面を成す。張り出し部は焼土が散在するものの面を成す部分は認められない。

**土層** 47層細砂粒含有暗褐色粘土および、23層  
**遺物** 暗灰茶色粘土を掘込んで構築されている。遺物は大部分13層黒褐色粘土に含まれており、土師器杯（1）甕（2）土錘（3・4）その他土師器小片が検出されている。

**規模** 不明。

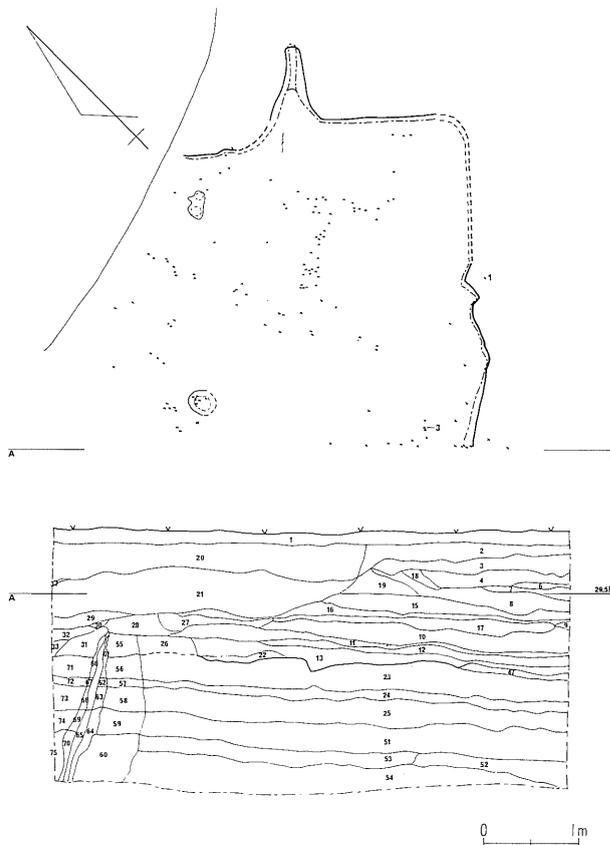


Fig. 16 第6調査区1号住居址



PL. 12 1号住居址（南より）

b. 2号住居址

位置 調査区の西隅に位置し、1号住居址、1号溝と重複している。住居址の東隅部分だけが検出されたにすぎない。直線的に伸びる東辺から、1号溝壁中位で直角に折れる様相を呈することから平面形は方形を呈すると思われる。東辺方位は、 $N-27^{\circ}-E$ を示す。床面は固くしまり、ほぼ水平に安定している。東隅寄りの床面上には、 $30 \times 40\text{cm}$ の範囲で平面三角形を呈する焼土塊が見られた。焼土塊は深さ $5 \sim 8\text{cm}$ の摺鉢状のピットにまんべんなく分布している。床面中央部には炭化木材が濃密に分布し、一部炭化木材の純層(79層)になる。炭化木材は、北東—南西、南東—北西の両方向を示し、後者が上位に堆積しているようである。炭化木材は床面の壁際にはみられない(住居址平面図中点は焼土塊、方向の判明した炭化木材は各々示し、判明しないものは範囲で示した)。壁はほぼ垂直に立ち上る。

土層 23層の暗灰茶色粘土、24層炭化物含有遺物 暗灰茶褐色粘土、25層暗灰茶褐色シルトを掘り込んで構築されており、59層灰茶褐色粘土、64層砂粒含有灰茶褐色粘土、69層黒褐色粘土、74層細砂粒含有黒褐色粘土、80層暗茶褐色粘土の各層で床面を構成している。床面は北西側で81層砂礫混在層が現われ不明確になる。覆土は71層細砂粒含有黒褐色粘土、72層暗褐色シルト、73層黒褐色粘土、78層暗褐色粘土がみられる。76・77層のシルト層より上位は1号溝の覆土である。

遺物は73・78層に含有され、特に東隅焼土塊付近に集中して出土しているが、いずれも小破片である(PL、31上)。

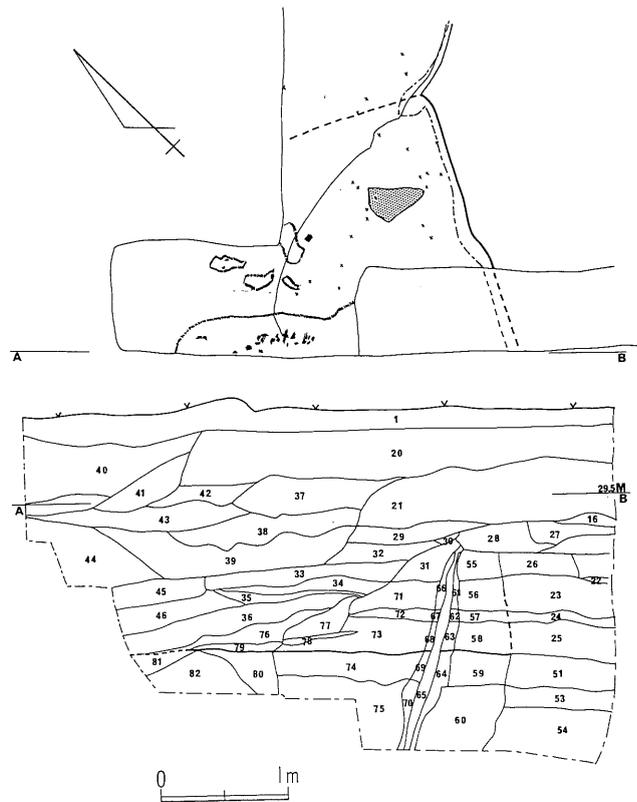


Fig. 17 第6調査区2号住居址



PL. 13 2号住居址(東より)

C. 3号住居址

位置 調査区の北部に位置し、4号住居址、  
概要 1号溝と重複している。大部分が1号溝  
によって削り取られ、1号溝東壁の傾斜  
面に当たる住居址の東隅部が残存して  
いるに過ぎない。残存している北東・南東  
壁からすると平面は方形を呈すると思わ  
れる。主軸方位はN-56°-Eを示す。床  
面は固い部分が多く、平で安定したもの  
である。壁はほぼ直立する。

柱穴は一本検出されている。平面不整  
円形を呈するもの下端は円形を呈して  
いる。掘り方は二段掘りであり、上段は  
わずかに傾斜をもち、下段は垂直である。  
また、東側の貯蔵穴寄りの上段壁は、他  
の床面形成土層と異なり、固くモロモロ  
になった粘土を埋めている。全体に炭化  
木材がみられる。上段は5cmの厚さをも



PL. 14 3号住居址 (南より)

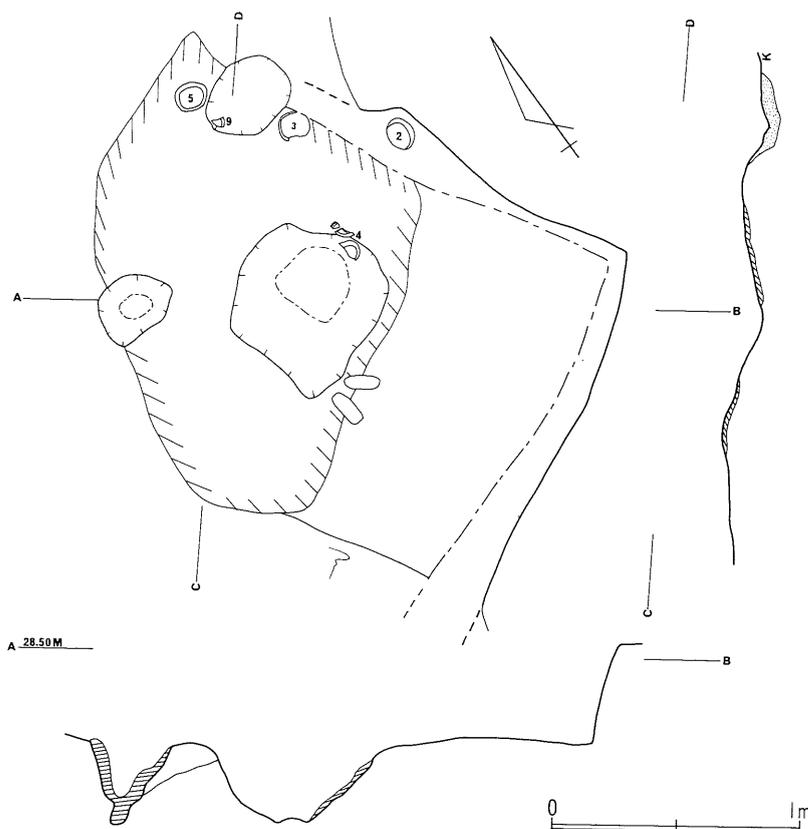


Fig. 18 第6区調査区3号住居址

ち、下段は全体を埋める量である。

柱穴の東南部に隣接して貯蔵穴がある。平面は不整の隅丸方形を呈する。北東壁のみほぼ直立するが他壁は30度前後の傾斜をもつ。ほぼ全面から板状の炭化木材が検出されているが、特に南西から南東側が顕著である。

北東壁下端の延長線上から住居址内にカマドの火床が検出されている。前面は円形に両側面・奥面は直に掘り込まれ、最深部は床面下15cmを計る。全面に固い焼土塊が分布している。煙道部は1号溝の東壁・4号住居址床面のいづれにも検出されず、比較的短かい形態をとるものと思われる。また焼土粒は、火床から貯蔵穴と柱穴の間にかけて炭化材の下面に散在している。

土 層  
遺 物

23層の暗灰茶色粘土、24層炭化物含有暗灰茶褐色粘土、23・24層間の細砂粒を含む暗茶褐色粘土、25層暗灰茶色シルト、51層灰ウグイス色粘土を掘り込んで構築され、床面は51層中にある。覆土は大部分が焼土粒・炭化材粒を含有する暗灰茶褐色粘土であり、壁際に一部砂粒を含有する灰茶褐色粘土が堆積している。

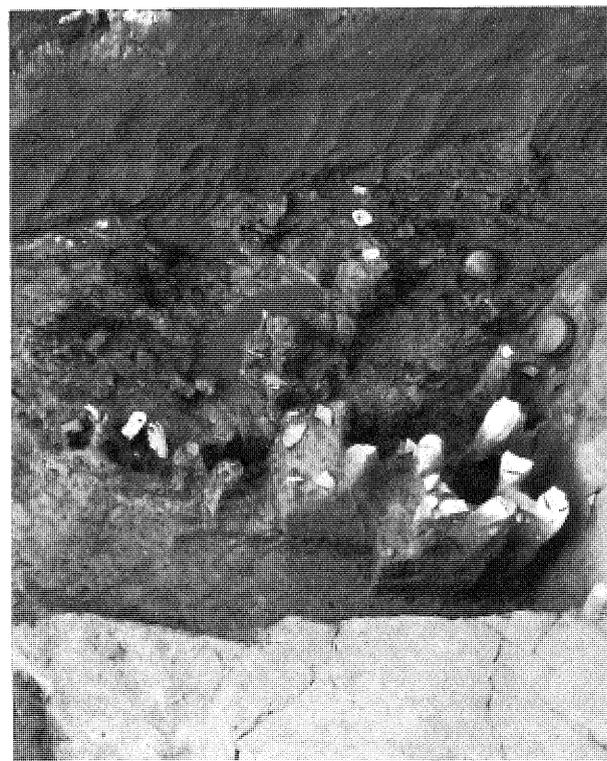
遺物は床面上、貯蔵穴内、壁、覆土中からまんべんなく出土している。最も多量に出土している器種は、土師器杯である。壁にかかって出土している2 (Fig 26) を始めとしてカマド右脇から貯蔵穴壁にかけて大部分出土している。カマド左脇からは5が、カマド焚口からは9が出土している。甕類は東隅からの流入中にみられる。また、貯蔵穴東南脇床面上には長さ15×5cm長円形河原石が3個出土している。

規 模

全体は不明、柱穴上端径25~30cm、下端径7cm、貯蔵穴60×60cm、下端径26cm。



3号住居址カマド焚口 (東より)



3号住居址遺物出土状況 (東より)

d. 4号住居址

位置 調査区の北端に位置し、1号溝および3号住居址と重複している。大部分が調査区域外に位置することと、1号溝・3号住居址に削除されていることから、東南壁および壁下の床面がわずかに調査されたにすぎない。平面形態は不明である。床面は固くしまり、ほぼ水平面を成す。床面上には東西方向に焼土・炭化材が検出されている（住居址平面図中、カヤ状の植物体で繊維方向の判明するものは各々示し、判明しないものは斜線の範囲で示した）。焼土は小さなブロックもしくは粒子状になり、炭化材層の上位に堆積している。壁は凹凸があるものの全体ではほぼ直線を呈する。東南壁はN-45°-Eの方位を示す。

東南壁直下・調査区東端に焼土塊と、灰層が掘り込み内にみられ、壁自体に掘り込みがみられないところから、カマド焚口の南端部に当たると思われる。焼土（土層図中点々部分）・灰の両層では、前者が上位に堆積している。

土層遺物 23・24層間の細砂粒を含む暗茶褐色粘土、25層灰茶色シルトを掘り込んで構築されており、51層灰ウグイス色粘土を床面としている。カマド焚口部は51層をわずかに掘り込んでいる。

覆土は焼土粒・炭化材粒を含む暗茶褐色粘土層（土層図中B）を主体にして、灰ウグイス色粘土を部分的にレンズ状にはさむ（土層図中C）・またカマド焚口前面には東西方向に焼土・炭化材層が広がる（土層図中A）。

遺物は東南壁下のB層中、焼土・炭化材中に検出されているがいずれも細片である（PL. 31下）。

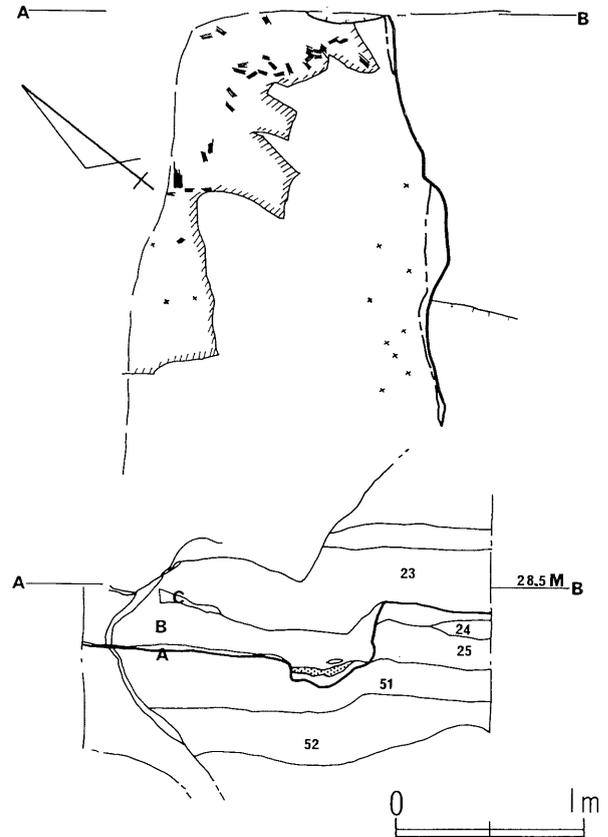
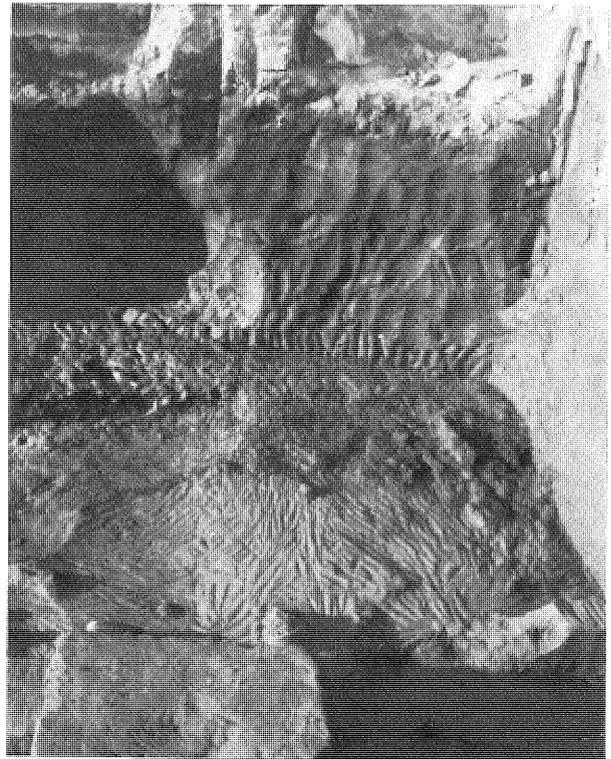


Fig. 19 第6調査区4号住居址



PL. 16 4号住居址（東より）

e. 5号住居址

位置 調査区の東隅に位置する。覆土上面に  
概要 は1号土壇が在る。西隅のみ調査された  
に過ぎず、大部分は東方の調査区域外に  
広がると思われる。

平面形態は不明であるが、西隅がほぼ  
直角を成し、北西・南西両壁が直線を成  
すことから、方形を呈するものと思われ  
る。

床面は、固い面がほとんど無いものの  
ほぼ水平面（東南部セクションライン付  
近のみ窪みをもつ）を成す。

土層 23層の暗灰茶色粘土、24層炭化物含有  
遺物 暗灰茶褐色粘土、25層暗灰茶色シルトを  
掘り込んで構築され、51層灰ウグイス色  
粘土を床面としている（セクションライ  
ン付近の窪みは51層中）。覆土は焼土・  
炭化材粒を含有する暗灰茶褐色粘土であ  
る（A層）。

遺物は、覆土中からの出土であり、土  
師器台付甕脚部（1）、須恵器器台脚部  
（2）、須恵器甕（3）等がみられる。

規模 全体は不明。壁高45cm。

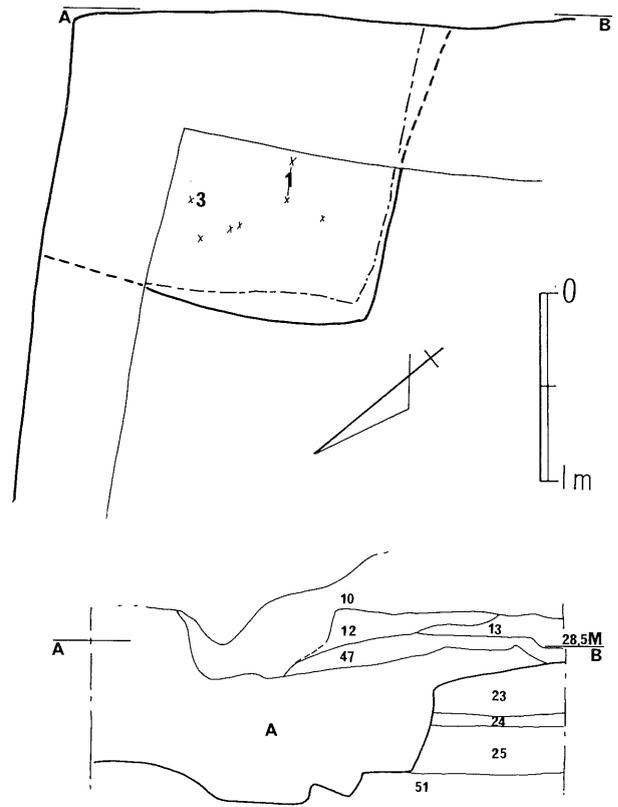
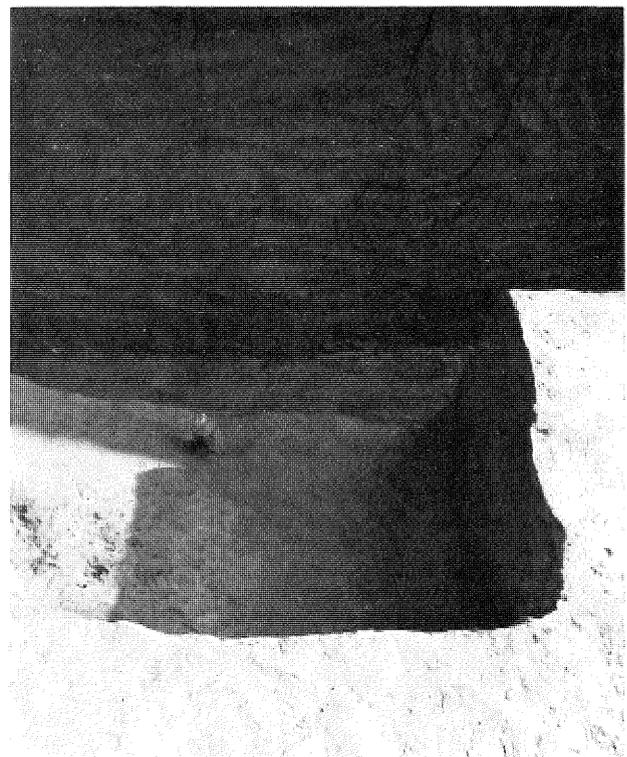


Fig. 20 第6区調査区5号住居址



PL. 17 5号住居址（西より）



土層 2号竖穴は92層灰茶褐色粘土、25層暗  
遺物 灰茶褐色シルトを掘り込んで構築され、  
25層中に床面をもつ。覆土は83層暗褐色  
粘土の他は不明である。

1号竖穴では、23層暗灰茶色粘土、24  
層炭化物含有暗灰茶褐色粘土、25層暗灰  
茶褐色シルトあるいは1号竖穴覆土83層  
を掘り込んで構築され、93層灰褐色シル  
トあるいは51層灰ウグイス色粘土を床面  
とする。床上にはタール状の堆積物（土  
層図中斜線部）が載り、50層灰褐色シル  
ト、49層炭化物含有灰褐色シルト、14層  
暗褐色粘土を主体に、84層暗灰褐色粘土  
等を覆土とする。また床面を突き破って  
噴砂（88層）がみられ、その砂を多量に  
含んだ暗褐色粘土（87層）もある。

3号竖穴は92層、83層、50層、84層、  
14層等の1・2号竖穴の覆土・基盤土を  
掘り込んで構築し、その底面としている。



1号竖穴（南より）



2号竖穴（南より）



3号竖穴（東より）

覆土には91層暗褐色粘土、90層灰茶褐色粘土、89層暗灰褐色粘土等が下位に、13層黒褐色粘土、12層焼土粒含有暗褐色粘土が上位にみられる。

遺物は1号竖穴が土師器杯(1~3)甕(4~6)、須恵器甕(7~10)、土錘(11)等がみられるがいずれも小破片であり、14・49層中からの出土である。2号竖穴は小破片のみで、覆土中からの出土である。3号竖穴は須恵器甕(1・2)、土錘(3・4)等が出土しているが12・13層中からの出土であり小破片である。

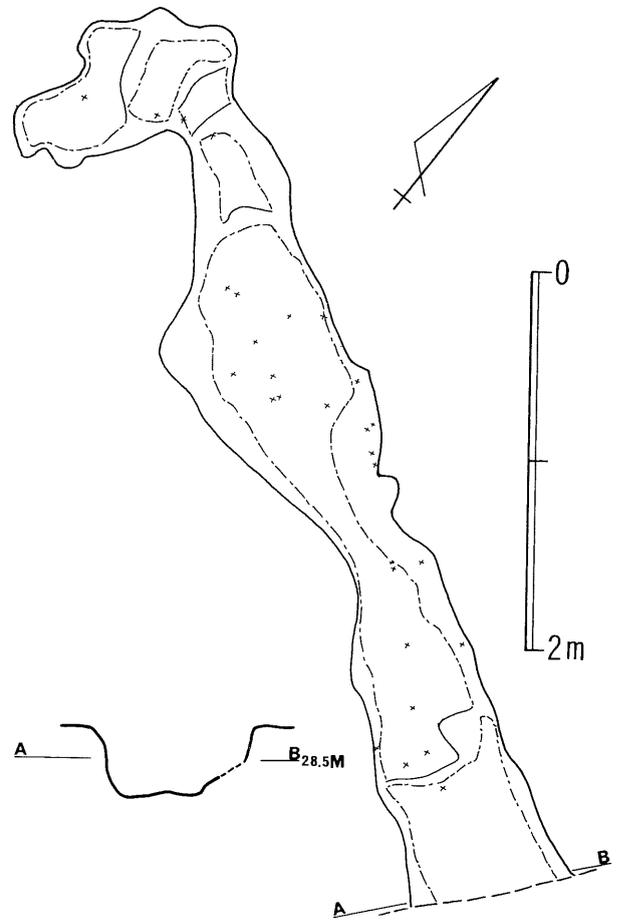


Fig. 22 第6区調査区1号土坑

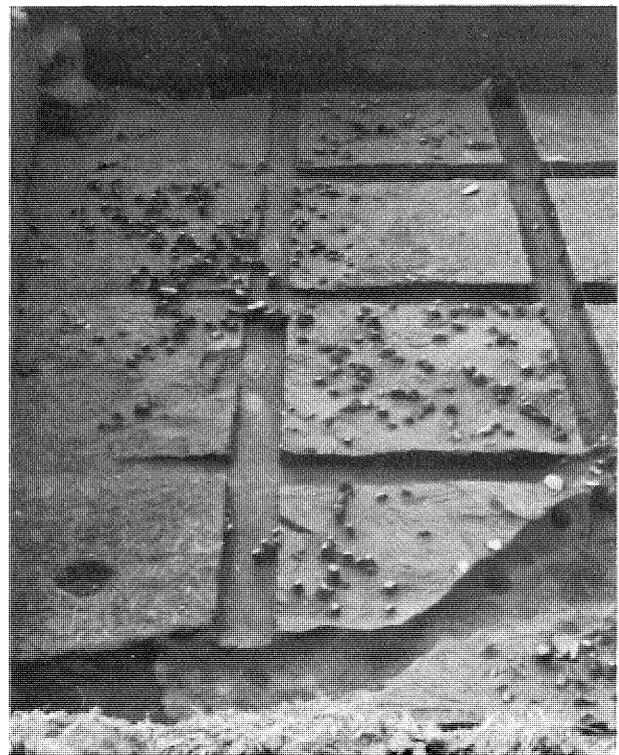
g. 1号土坑

**位置** 調査区の東部に位置し、5号住居址、  
**概要** 2・3号土坑と重複している。南西から北東へわずかに伸び、L字形に折れて南東方向へ伸びる。さらに調査区外へ連続しているようである。浅い溝状を呈し、底面は比較的平である。底面は南西部で浅いものの、南東方向へ移行するに従って、段を成して深くなる。

**土層** 5号住居址の覆土であるA層焼土・炭  
**遺物** 化材粒含有暗灰茶褐色粘土、12層炭化材粒含有暗褐色粘土、13層黒褐色粘土を掘り込んで構築され、23層暗灰茶色粘土等を底面とする。覆土は10層細砂含有灰褐色粘土である。

遺物は覆土中に散在するものの、いずれも小破片である。

**規模** 延長5.5m、最狭部幅34cm、最広部幅92cm、最浅部5cm、最深部42cm。



PL. 19 1号土坑(北より)

h. 2号土坑

位置 調査区の北西端に位置し、南西端で1号土坑と、南東部の上辺外柵で5号住居址と重複している。

全体に浅い掘り込みであり、さらに外柵に不規則なダラダラとした緩斜面をもつ。土坑内では南東側へ向けて深みを増すが、下端としてとらえられるものではない。平面は不規則な楕円形を呈する。

土層 23層暗灰茶色粘土、5号住居址覆土の遺物 焼土・炭化材粒含有暗褐色粘土（A層）12層炭化材粒含有暗褐色粘土を掘り込んで構築され、11層淡褐色シルトを覆土とする。

遺物はほぼ全面から出土しているが、底の深い部分に集中している傾向がみられる。土師器杯（1～3）、甕（4～8・10）、高杯（9）、壺（11）、甑（12・13）、土製支脚（14）等がみられる。また、中には外柵部出土破片と接合する遺物（11）もみられた為、外柵部に位置する（8）も本遺構出土とした。

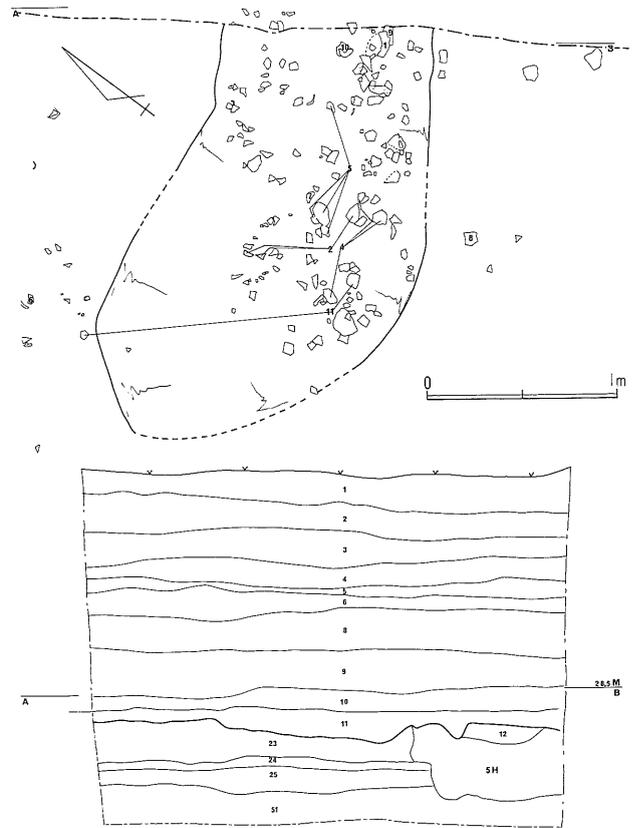
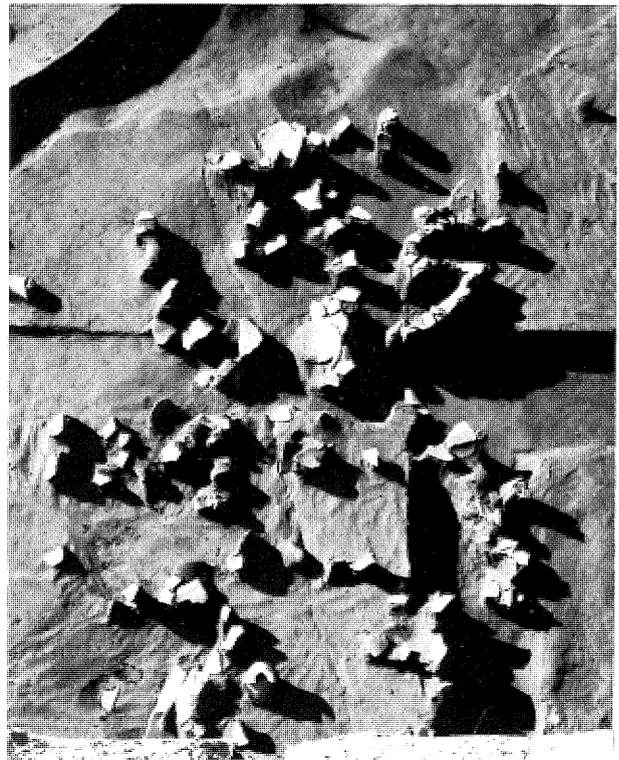


Fig. 23 第6調査区2号土坑



PL. 20 2号土坑（北より）

i. 3号土坑

位置 調査区のほぼ中央北東寄りに位置し、  
概要 北東端部で1号土坑と重複している。平面形態は、東西方向に長い不整の隅丸長方形を呈する。しかしながら、落ち込みの深さは3～5cmであり、人為的な掘り込みかどうかは不明であり、単に土層の窪みであるとも思われる。そのような窪みに土器・土器片が集中したものかもしれない。

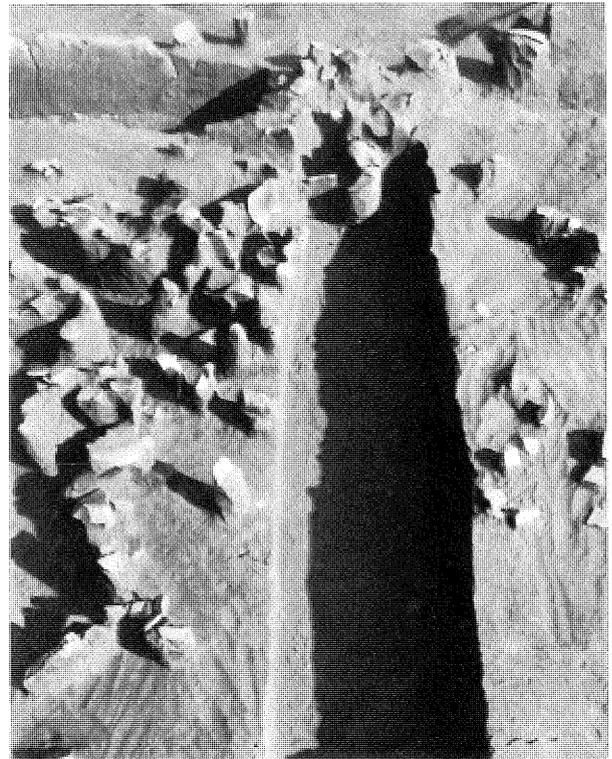
土層 12層炭化材粒含有暗褐色粘土、あるいは23層暗灰茶色粘土を掘り込んで（北東部は12層、南西部は12層が無く23層を掘り込んで）いると思われる。覆土は11層淡褐色シルトおよび、12層とほぼ同様な暗褐色粘土（12層に比して若干明るい粘土層）である。

遺物 土師器杯（1～3）、甕（4）がみられる。土坑内南半に杯、北半に甕というような器種の分離がみられる。

規模 長軸1.81m、短軸93～115cm。



Fig. 24 第6区調査区3号土坑



PL. 21 3号土坑（南より）

j. 1号溝

位置 調査区の北端から西端へかけて、北西  
概要 部一帯に位置し、1号、2号、3号、4  
号の各住居址を切断している。南西から  
北東へ流行し、東へ張り出す恰好で弯曲  
している。断面形は摺鉢状を呈する。そ  
の上面は一旦平坦面を成し、直に立上る。  
また上面には2号溝が重複している。

土層 最下面80・82層暗茶褐色粘土、77層灰  
遺物 茶褐色シルト、71層細砂粒含有黒褐色粘  
土、31層ウグイス灰色シルトを掘り込ん  
で摺鉢状の斜面を構築している。この摺  
鉢状斜面内に堆積する覆土は、33・34層  
砂礫混在、35層径1mm以下灰ウグイス色  
純砂、36層灰褐色純砂、45・46層砂礫混  
在、76層灰色シルト等、砂・礫を主体と  
する。一方、平坦面より上位では、28層  
灰ウグイス色シルト、16層灰褐色シルト  
15層淡褐色粘土、19層灰褐色シルトと続  
き、最上層は2層T A含有淡褐色粘土か  
ら掘り込んでいる。上面の覆土は、32層  
灰褐色細砂純層、29層灰ウグイス色シル  
ト、21層暗褐色シルト、44層1mm以下の  
灰褐色細砂純層がみられ、砂・シルトを  
主体にしている。さらに21・44層から新  
な掘り込みがみられ、39層灰褐色シルト  
38層砂礫混在、37層灰色シルト、43層砂  
礫混在、42・41層暗褐色シルト、40層灰  
色シルト、20層暗茶褐色シルトを覆土と  
している（2号溝）、このうち40層には  
小礫、41層には小礫と多量の腐蝕した植  
物体が含有されている。

遺物は土師器小片がわずかに出土して  
いるのみである。

規模 2号溝は不明、1号溝幅2.30m、深さ  
85cm。

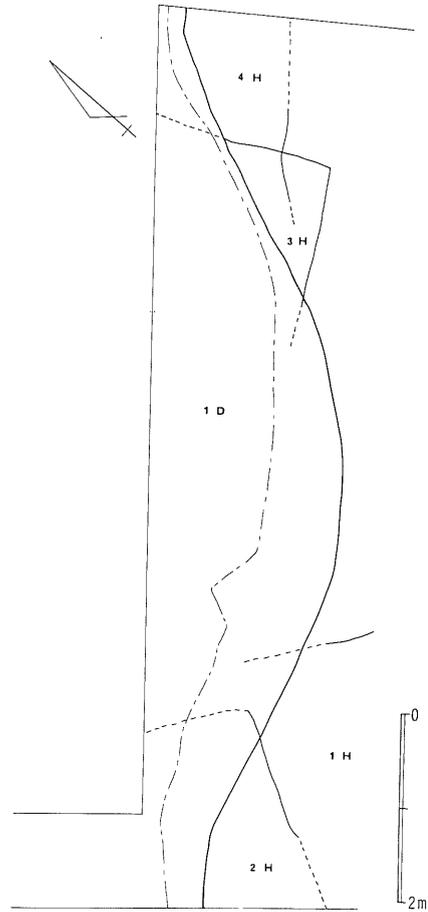
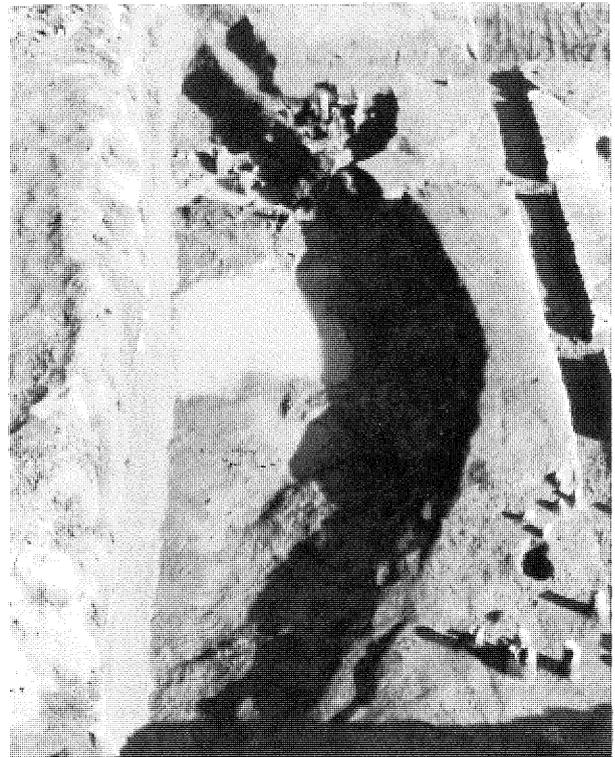


Fig. 25 第6調査区1号溝



PL. 22 1号溝 (南より)

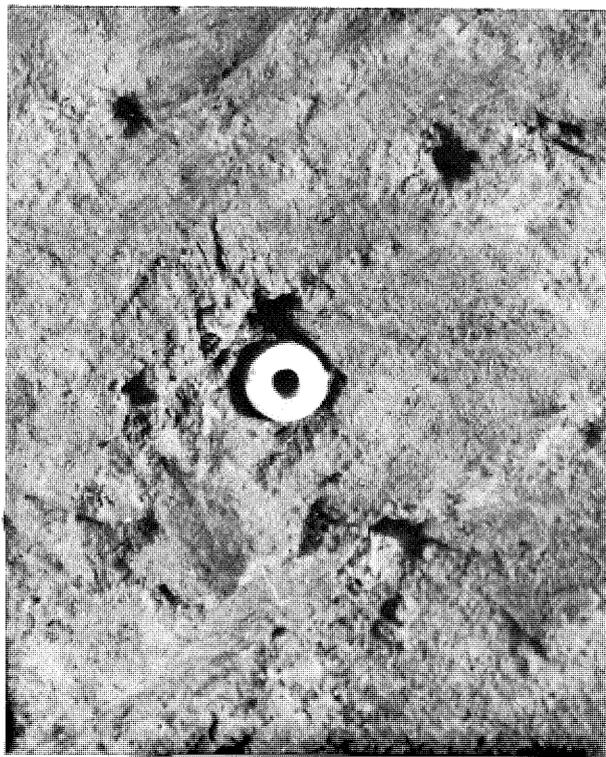
## k. 遺物包含層

土層 第6調査区で検出された遺構は全て23層暗灰茶色粘土より上位（4号住居址のみ23・24層間の細砂粒含有暗茶褐色粘土からの掘り込み）である。しかしながら各遺構の基盤層の一である24層炭化物含有暗灰茶褐色粘土には、遺構を伴わないもの一括して遺物が出土している。

- 位置 A・高杯 1号溝斜面中  
 (Fig. 15) B・壺 1・3号土坂下東南部  
 C・罎 3号竪穴北部  
 D・壺 3号住南部  
 E・白玉 B出土地点東南脇  
 F・管玉 1号住居址下



罎



白玉



管玉

## ℓ. 出土遺物

### (1) 土師器杯 (Fig. 26、P L. 24、25)

1H-1. 推定口径13.4cm、内弯する口縁から、全体に丸味をもつ、深い体部へ移行する。口縁は横ナデ、外面に段を有する。体部外面はケズリ、内面は横のナデが丁寧に施され、口縁との間に段をもたない。胎土は軟質赤色粒を含み粗い。淡赤褐色を呈する。㊦残存。

3H-1. 推定口径15.4cm、推定高3.9cm、直線的に外傾する口縁から明確な稜をもって体部へ移行する。口縁部は横ナデ、体部内面は丁寧なナデ、外面はケズリ、周辺部には一部ナデが加わる。赤茶褐色を呈する。胎土は細かい砂粒を多量に含みザラつく。全体の㊦残存。

3H-2. 口径14.8cm、高さ4.5cm、浅い体部から矩形を呈する稜部を経て、外反する口縁部へ移行する。口唇部はつまみ上げられて直立する。口縁部横ナデ、体部内面はナデ、中央部と中間部におさえによる凹部がみられる。外面は円周状のケズリ、稜部にはナデが加わる。淡赤褐色を呈する。胎土は細砂粒が多くザラつく。完型。

3H-3. 口径14.9cm、高さ4.6cm、外反する口縁から明確な稜をもって体部へ移行する。口縁部および体部内面上位は横ナデ、体部内面中央はナデによってわずかなくぼみをもつ。体部外面はケズリ。胎土は細かい。黒褐色を呈する。口縁の㊦欠。

3H-4. 口径15.9cm、高さ4.3cm、直線的に外傾する口縁から明確な稜をもって体部へ移行する。口縁部および、体部内面上位横ナデ。口縁外面の中心に横ナデによる段をもつ。体部内面中央部はナデ、体部外面はケズリ。胎土はやや粗くザラつく。㊦づつ離れて出土しており、一方は黒色一方は赤褐色を呈する。完型

3H-5. 口径14.3cm、高さ4.7cm、内弯気味に外傾する口縁から丸味のある稜をもって体部へ移行する。全体に丸味をもつ。口縁部横ナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。胎土は細かいが、軟質赤色粒を多く含む。赤褐色を呈する。口縁の一部欠。

3H-6. 推定口径12.8cm、ゆるやかに外反する口縁から脹らみ状の稜をもって体部へ移行する。口縁部の横ナデによって口唇に一条の条線が入る。体部外面ケズリ。胎土は粗く、赤褐色を呈する。㊦残存。

3H-7. 推定口径15.0cm、外傾する口縁から稜をもって、浅い体部へ移行する。口縁および体部内面上位は横ナデ。体部外面ケズリ、内面中心部はナデが施される。胎土はやや粗い。淡赤褐色、黒褐色の相克。㊦残存。

3H-8. 推定口径13.0cm、やや内弯気味に外傾する口縁から小さな稜をもって浅い体部へ移行する。口縁部に横ナデが施され、外面には明確な稜線が残る。胎土は細かいが、軟質赤色粒を多く含む。黒褐色を呈する。口縁部の㊦残存。

3H-9. 推定口径14.0cm、推定高3.7cm、やや反り気味に内傾する口縁から、明確な稜をもって体部へ移行する。稜は断面三角形に作りだされている。口縁部横ナデ、体部外面ケズリ、内面は横のナデが施され、放射状の暗文をもつ。胎土はやや粗い、黒褐色を呈する。㊦残存。

1S-1. 推定口径15.2cm、内傾する口縁から稜をもって体部へ移行する。口縁および体部内面上位は横ナデ、体部内面は丁寧なナデが施され、光沢さえもつ。体部外面はケズリ、胎土は細かく、黒褐色を呈する。㊦残存。

1S-2. 推定口径14.2cm、口縁は外傾し、口唇のみさらに外傾する。わずかな稜をもって体部へ移行する。口縁および、体部内面最上位横ナデ。体部外面ケズリ、体部内面ナデ。胎土は粗く赤褐色を呈する。㊦残存。

1S-3. 推定口径14.6cm、脹らみをもって直立する口縁であり、口唇のみ外傾する。口縁部上・下端に加えられた横ナデによって中央部の脹らみ、口唇の外傾がつくりだされている。胎土は粗く、赤褐色を呈する。口縁のみ㊦残存。

2P-1. 推定口径13.2cm、外反する口縁から稜をもって浅い体部へ移行する。口縁部横ナデ。口唇は丁寧なナ

デによって外方へ尖るように作りだされている。体部外面ケズリ。胎土は粗く、淡赤褐色を呈する。㊦残存。

2 P—2. 推定口径13.3cm、内傾する口縁から稜をもって体部へ移行する。表面が剥離しており整形方法は不明であるが、口縁外面に横ナデによる沈線がみられる。胎土は粗く、黄茶褐色を呈する。㊦残存。

2 P—3. 推定口径15.3cm、外反する口縁から丸味のある稜をもって体部へ移行する。表面が剥離しており整形方法は不明であるが、体部外面に面取り痕がみられ、ケズリが施されたと思われる。胎土は粗く、赤褐色を呈する。㊦残存。

3 P—1. 口径12.4cm、高さ4.0cm、外傾する口縁から明確な稜をもって体部へ移行する。口縁および、体部内面上位は横ナデ。口唇に沈線をもつ。体部内面中央部ナデが施され、ヘラ痕が回転放射状に残る。外面はケズリ。胎土は粗く、赤褐色と黒色が相克する。口縁の $\frac{1}{2}$ 欠。

3 P—2. 口径12.5cm、高さ4.4cm、脹らみをもって外傾する口縁から稜をもって体部へ移行する。表面が剥離しており詳細は不明であるが、痕跡からすると、口縁は横ナデ、体部外面はケズリが施されているようである。また、口唇には浅い凹みをもつ。胎土は粗く、淡赤褐色を呈する。口縁の $\frac{1}{2}$ 欠。

3 P—3. 推定口径14.6cm、ほぼ直立する口縁から明確な稜をもって体部へ移行する。口縁および体部内面上位は横ナデ、内面中央はナデ。体部外面はケズリが施される。胎土は細かく、黒褐色を呈する。㊦残存。

## (2) 土師器甕 (Fig. 27、P L. 26、28)

1 H—2. 推定口径24.8cm、口縁は大きく外反し、胴は下半で急に収束する形態を示す。口縁部横ナデ、胴部は中位から上は横を主体としたナデを施す。下位は特に丁寧に整形が施され器面が密になっている。外面は斜のケズリ、もしくはナデが上から下へ施され、上部の胎土が盛り上り、稜を成す部分もある。胎土は粗く、砂粒を多量に含む。淡茶褐色を呈する。甕として使用されたと思われる。底部欠全体の $\frac{1}{3}$ 残存。

3 H—10. 推定口径17.8cm、口縁は直線的に外傾し、胴部はほとんど脹らみをもたない。口縁部横ナデ、胴部内面は横のナデ、外面は縦のケズリの後ナデを加える。胎土は粗く、砂礫、軽石粒を多量に含む。淡茶褐色を呈する。上位の一部のみ残存。

3 H—11. 推定口径14.0cm、口縁は大きく外反し、胴は大きく脹らむ形態を示す。口縁部は横ナデ、胴部内面は横のナデ、外面は縦のナデ、胎土は粗く砂粒を多量に含む。全面吸炭。上位の一部のみ残存。

3 H—12. 推定くびれ径14.2cm、口縁は外反する。胴は肩が張らず、中央付近に脹らみをもつ。口縁部横ナデ、胴部内面横のナデ、外面は縦のケズリ、胎土は粗く、砂粒を多量に含む。外面朱色、内面淡黄色を呈する。くびれ部付近の $\frac{1}{2}$ 残存。

3 H—13. 底径5.2cm、内外面共ナデ、木の葉底を有する。胎土は粗く、砂粒を多く含む。淡黄色を呈するが2次火熱を受け朱化している部分もある。全体に黒ずむ。底部のみ残存。

5 H—1. 推定脚底径8.8cm、直線的に開く形態をとる。外面の一部に縦方向の刷毛目も見られるが、磨耗しており定かでない。胎土は粗く、大粒の砂粒を多量に含む。淡黄色を呈する。脚部のみ残存。

3 P—4. 甕と思われる。推定口径21.6cm、口縁部横ナデ、口唇部に凹帯をもつ。胴部外面縦のケズリの後、丁寧な横のナデ、内面横のナデ、胎土は粗い。淡茶褐色を呈し、外面に黒斑をもつ。上位の $\frac{1}{3}$ 残存。

1 S—4. 推定口径13.4cm、丸味の強い胴部から大きく括れて短く外反する口縁へ移行する。口縁部横ナデ、胴部外面は縦のケズリの後、横のナデ、内面は横のナデが丁寧に施される。胎土は粗く、軽石粒を含む。口縁部および胴部外面茶褐色、胴部内面黒褐色を呈する。上位の $\frac{1}{3}$ 残存。

1 S—5. 推定口径17.8cm、口縁部横ナデの後、ナデを加える。口唇の上・外面に凹帯をもつ。胴部外面縦のケズリの後、斜のナデ、内面横のナデ。胎土は粗いが器面は良く調整されている。芯は黒色、内外面は淡黄白色

を呈する。口縁部の $\frac{1}{2}$ 残存。

1 S - 6 . 底径8.4cm、外面は縦または斜のケズリの後、一部横のナデが加わる。内面はナデ、底面は縁部円周状のケズリ、中央部直線状のケズリが施され、平底を呈する。胎土は粗く黒ずんだ淡黄色を呈する。底部のみ残存。

(3) 2号土坑出土遺物 (Fig. 28, P L . 27・28・32) ※杯については(1)参照

4 甕 . 推定口径24.4cm、口唇部がわずかに外反するものの、ほぼ直立する口縁から球形の胴部へ移行する。口縁部横ナデ、外面中央に凹帯をもち、内面はナデが加わる。胴部外面横のケズリの後、縦のナデ、内面横のナデ。口縁・胴接合部の内面に口縁部胎土が未調整のまま残る。胎土は粗く、軟質赤色粒を含む。朱色を呈し、上位の $\frac{1}{2}$ 残存。

5 甕 . 推定口径18.4cm、口縁は大きく外反するものの、下位はやや直立気味になる。胴部は球形を呈すると思われる。口縁部横ナデ、胴部外面縦のナデ、内面横のナデ。胎土は粗く、外面淡黄色、内面赤褐色を呈する。上位の $\frac{1}{2}$ 残存。

6 甕 . 推定口径15.7cm、口縁部は反気味に外傾する。口縁部および胴部外面上位横ナデ。胴部外面縦のケズリ、括れ部にケズリ歯止め痕を残す。内面木口状工具による横の深いナデ。胎土は細かく、軽石の細粒を含む。淡茶褐色・暗褐色が相克し、外面に黒斑をもつ。上位 $\frac{1}{2}$ 残存。

7 甕 . 推定口径17.7cm、外反する口縁からゆるやかに括れ、脹らみをもつ胴部へ移行する。口縁部横ナデ、胴部内面横のナデ、外面縦のケズリの後、横のナデ、一部にケズリ痕がみられる。胎土は粗くザラつく。淡赤褐色を呈し、外面に黒斑をもつ。上位の $\frac{1}{2}$ 残存。

8 甕 . 底径5.3cm、外面は、胴部が縦のケズリ、底部ケズリ、底部周辺は横のケズリが施される。内面上位は横のケズリ様ナデ、下位から底面は縦方向のナデツケが施される。胎土は非常に粗く3~5mm大の礫を多量に含む。胴部外面および内面上位は淡茶褐色、内面下位は灰褐色を呈し、底部外面に黒斑をもつ。中下位の $\frac{1}{2}$ 残存。

9 高杯 . 括れ径5.0cm、杯内面ナデ、脚部外面は横のナデによって凸帯がみられる。内面は斜のナデツケ。胎土は粗く、茶褐色を呈する。脚上位のみ残存。

10 甕 . 推定口径20.8cm、外傾する口縁から脹らみをもつ胴部へ移行する。整形方法は不明であるが、口唇直下内面に横ナデによる凹をもつ。外面括れ部には、縦のケズリ歯止め痕がみられる。胎土は非常に粗く1~3mm大の礫を多量に含む。外面黄白色、内面黄灰色を呈する。口縁の $\frac{1}{2}$ 残存。

11 壺 . 推定口径12.2cm、わずかに外反するもののほぼ直立する口縁から、大きく括れて胴部へ移行する。胴部は肩の張った形態をとるものと思われる。口縁部横ナデ、胴部はほとんど整形痕が残っていないが、外面は横方向へ砂流が動き、両取りされた形跡がある。胎土は細かく軟質赤色粒を含む。赤褐色を呈す。口縁の $\frac{1}{2}$ 残存。

12 甗 . 推定口径16.0cm、大きく外傾する口縁から鋭く括れ、直線的な胴部へ移行する。口縁部横ナデ、胴部外面縦のケズリ、内面縦のケズリ様ナデ。胎土細かいが、軟質赤色粒・軽石粒の細粒を含む。赤褐色を呈する。上位の $\frac{1}{2}$ 残存。

13 甗 . 底径5.4cm、孔径3.0cm、平底の中央を割り貫いた後、内面からのナデツケを施している。外面底部周辺は横のケズリ、整形方法は底部付近のみ鮮明である。胎土は粗く2mm大の礫を多量に含む。赤褐色を呈する。底部から下位のみ残存。

14 土製支脚 . 径5.7cm、円柱状を呈するもので、全面ナデが施されている。胎土は細かく赤褐色を呈する。

(4) 須恵器 (Fig. 29, P L . 29)

5 H - 2 . 器台、回転のナデ整形。逆三角形を呈すると思われる透しは、鋭利な刃で切断され、他に痕跡を残

さない。胎土はやや粗く、軽石細粒を多く含む。小豆色を呈する。脚部の一部のみ残存。

5H-3. 甕. 胎土は細かいが軽石粒、小礫を多く含む、淡灰色を呈する。胴部最大径を有する部分と思われる。

1S-7. 蓋. 推定口径13.2cmを計る。天井部外面のみ削り、他は横ナデ、稜は丸味をもつ。胎土はやや粗く気泡もみられる。濃灰褐色、芯は小豆色を呈する。

1S-8・9・10. 甕の同一個体と思われる。9・10外面に自然釉がかかる。胎土は粗く、内外面は黒褐色、芯は、8が灰白色、9・10はさらにサンドイッチ状に黒色帯をもつ。

3S-1. 甕. 二条の沈線（上条は施文が二重になっている）を横走させた後、上下に櫛描き波状文帯を施している。上下いづれも7条の櫛による。最下波状文帯は大部分ナデで消されている。胎土は粗く、小礫を多量に含む。灰黒褐色を呈する。

3S-2. 甕. 外面に自然釉がかかる。特色は1S-9・10とほとんど同一であり、同一個体と思われる。

(5) 包含層出土遺物 (Fig. 29, PL. 30)

A. 高杯. 脚高7.5cm、脚裾径10.0cm、括れ径2.7cmを計る。脚中央部には円孔が3孔穿たれている。円孔周囲はきれいに調整されている。外面は全面丁寧なナデの後、縦の磨きが細かく施されている。内面は、裾部横のケズリ、上位は横のナデつけで調整されている。胎土は粗い、赤褐色を呈する。

B. 壺. 口径16.9cm、頸部径11.3cm、頸部高7.2cm、胴部最大径29.0cm、胴部下半欠損、口縁は頸部から外反し、胴部は球形を呈する。口縁部は内外面共丁寧なナデで仕上げられている。胴部外面は剝離が激しく整形痕は不明であるが、細かい櫛状工具でナデている部分もみられる。内面は指頭で接合したままの状態凹凸が激しい。頸部付近の一部にヘラで横へ連続したナデを施している部分もある。頸部は口縁のナデ整形の後、細かい櫛状工具で縦方向のナデを施している。結果として頸部最下位に明確な稜をつくり出している。内面は、口縁側の胎土を胴部にかぶせたままである。胎土は細砂粒を多量に含み、明るい茶褐色を呈する。

C. 埴. 口径9.2cm、括れ径5.4cm、胴部最大径6.8cm、底径2.0cm、高さ8.8cmを計る。胴部高は4.5cmで口縁高との比率はほぼ1対1である。口縁部は内外面共横のナデの後縦の磨き、磨きは、外面は簿いものの、内面は強く施されている。胴部外面は横のケズリの後ナデを加える。下位にはナデの加わり方が弱い。底部は上げ底状を呈している。胴部内面はヘラ状工具による横のナデによって調整されている。胎土は粗く、よごれた黄褐色および、黒ずんだ赤褐色を呈する。完型

D. 壺. 頸部径7.8cm、胴部最大径13.6cm、胴部高10.4cmを計る。口唇部欠損、胴部最大径は下位に在って、底部は平坦面をもたない。表面が剝離している為、整形についてはほとんど不明であるが、残存状況の良いところからすると、口縁部は横ナデ、他は全面ナデが施されたと思われる。また、胴部外面上位には面取りされた箇所もみられる。胎土は細かいが気泡が多く、赤褐色および、淡黄褐色を呈する。

E. 白玉. 直径6mm、厚さ3mm、円孔径2mmを計る。滑石製、下端はわれた形跡があるため、本来はもっと厚かったものと思われる。

F. 管玉. 長さ1.8cm、径0.7~1.0cm、孔径2.3mmを計る。不整円形を呈し、上下で径も異なる。縦方向に面取りされている。

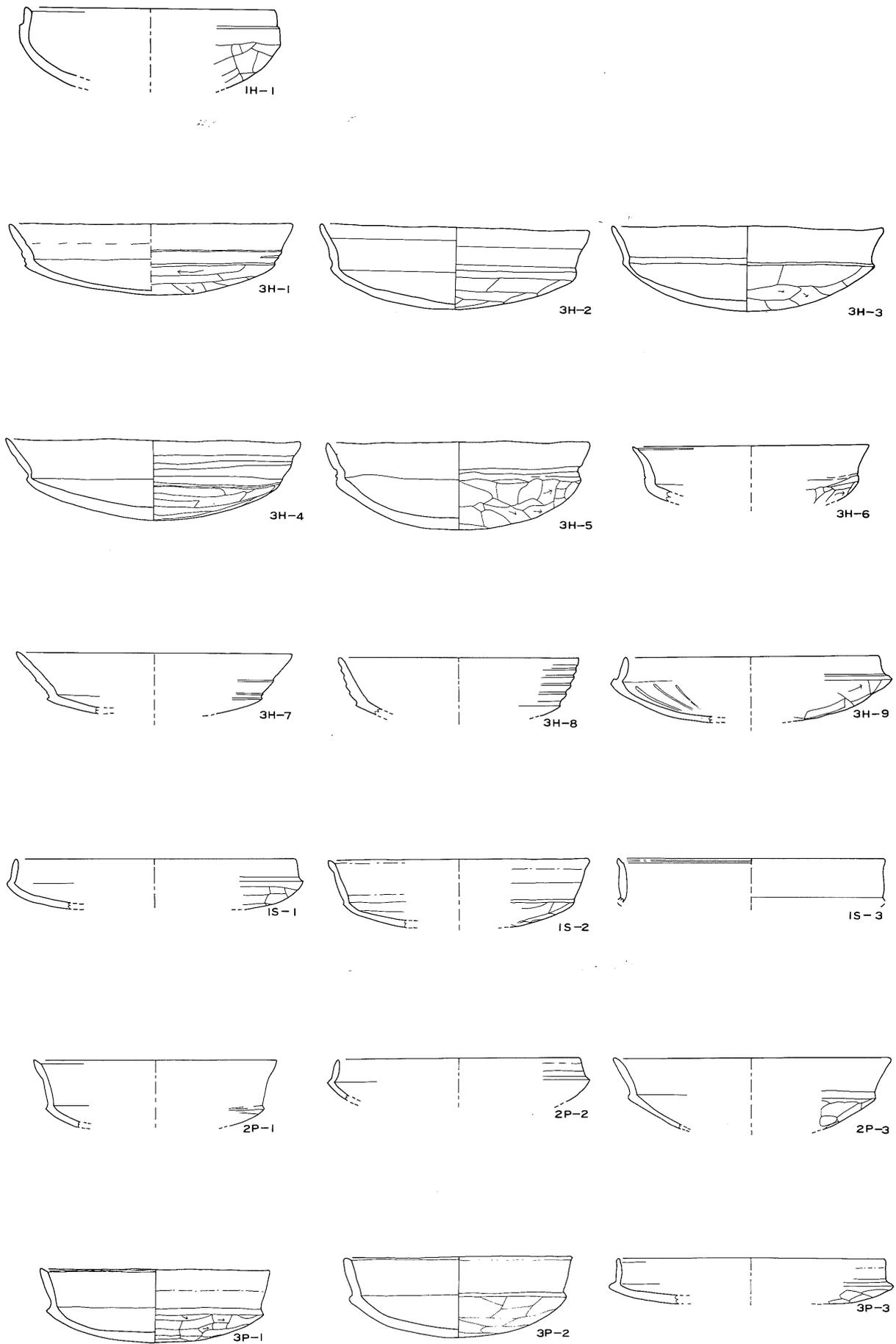


Fig. 26 第6調査区出土遺物実測図(1)土師器杯

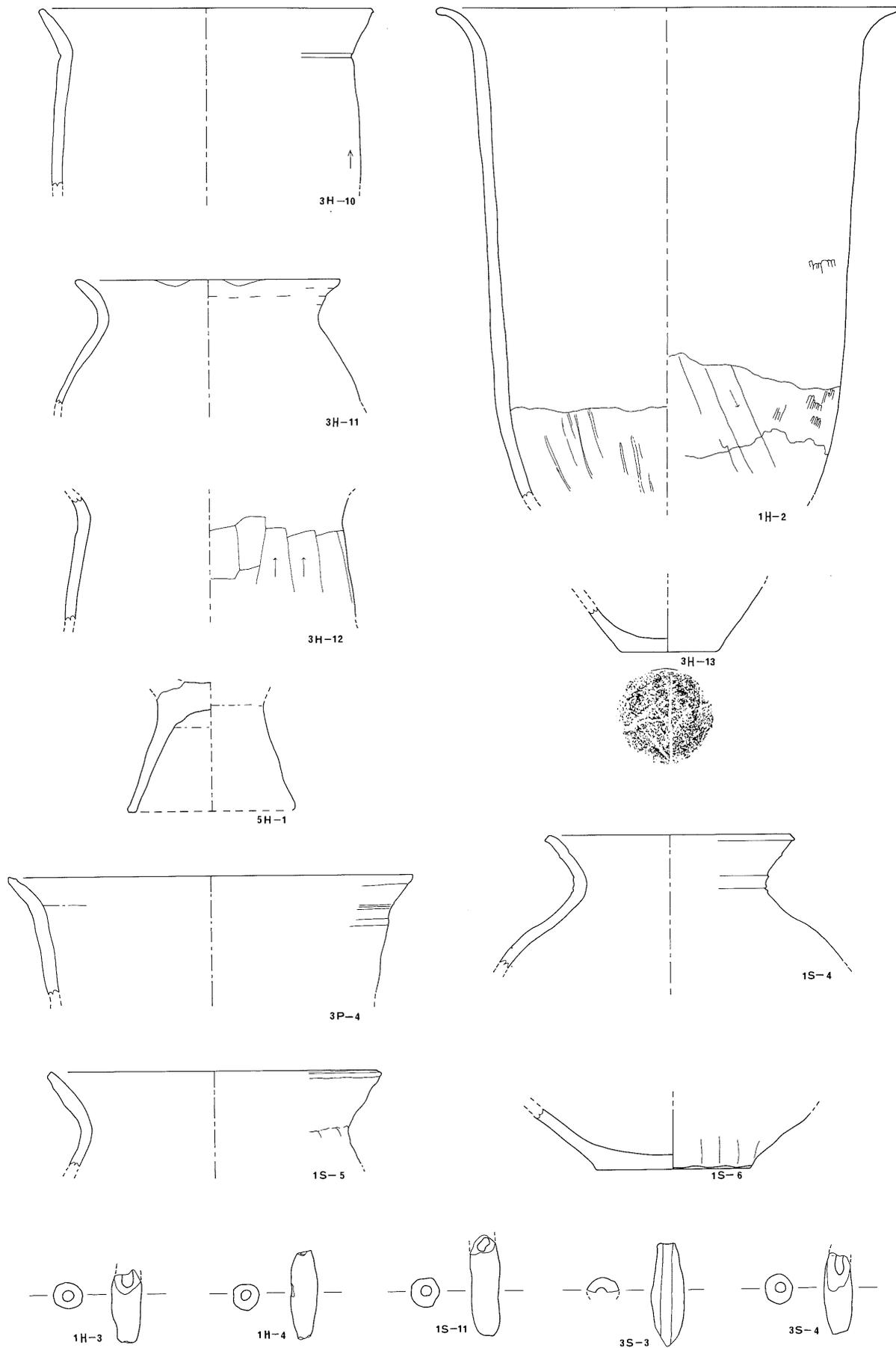


Fig. 27 第6調査区出土遺物実測図(2)土師器・土錘

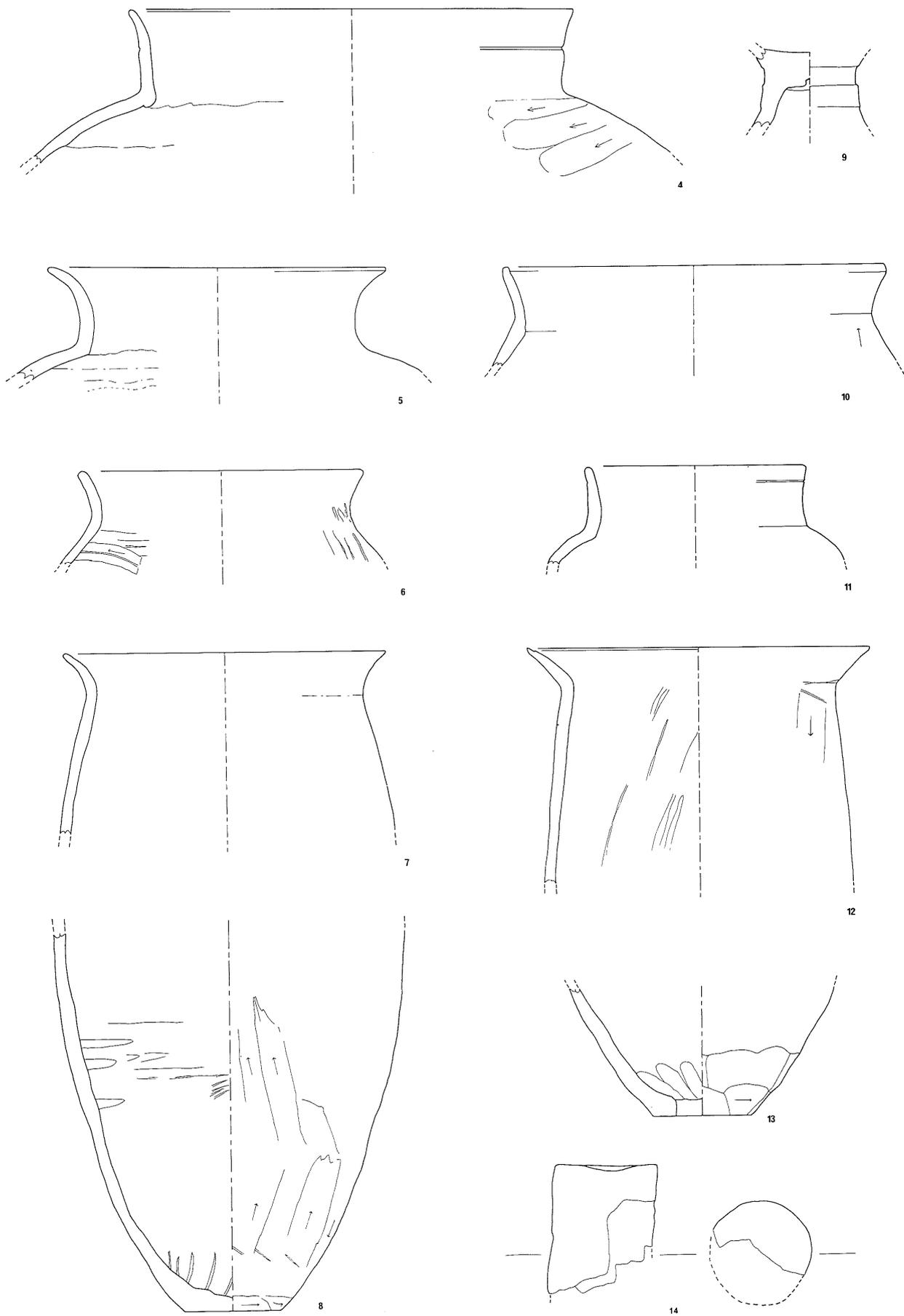


Fig. 28 第6調査区出土遺物実測図(3)2号土坑出一括

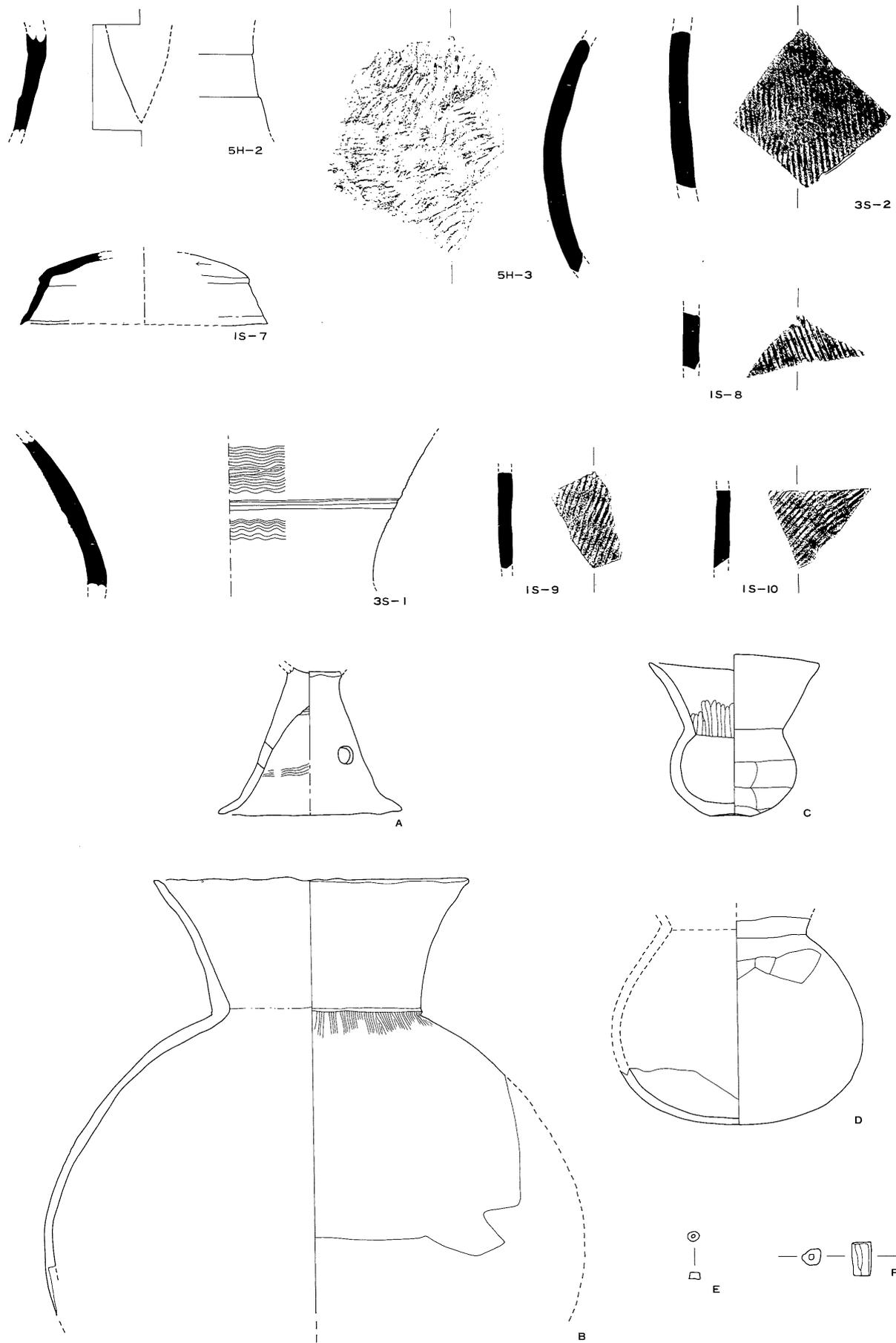
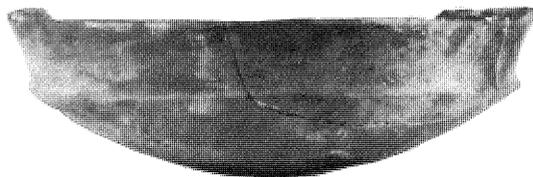
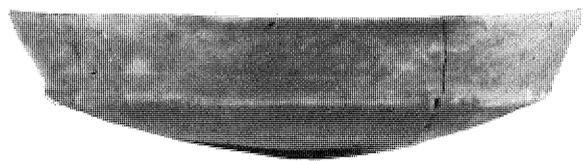
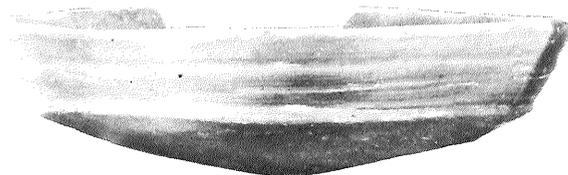
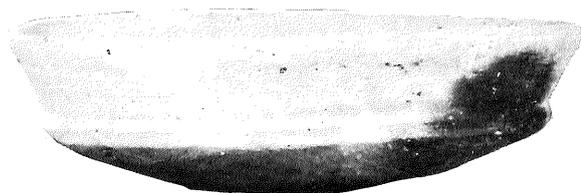


Fig. 29 第6調査区出土遺物実測図(4)須恵器包含層出土一括



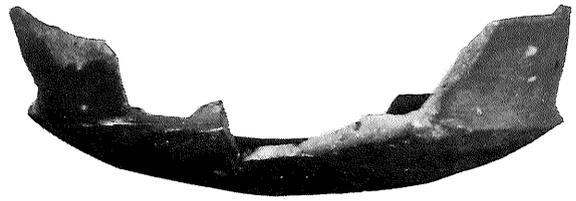
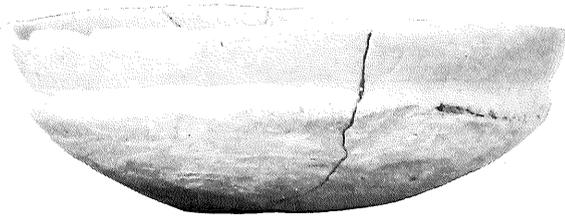
3H-1

3H-3



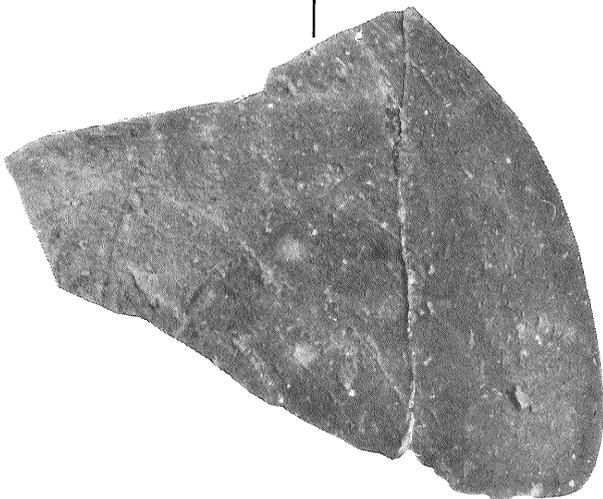
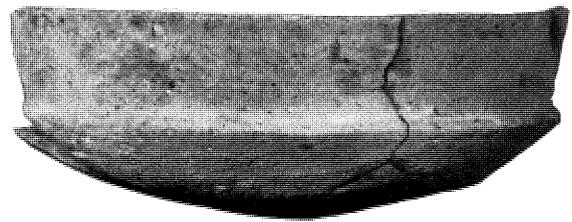
3H-2 — 47 —

3H-4



3H-5

3P-1

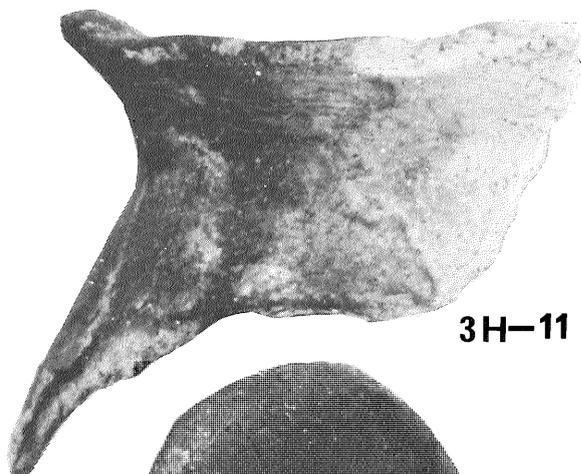


3H-9

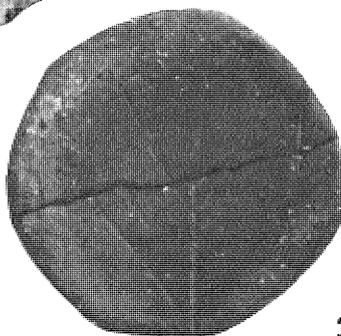
3P-2



3H-10



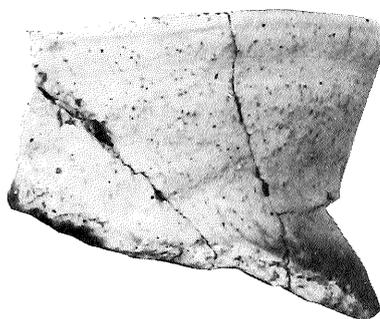
3H-11



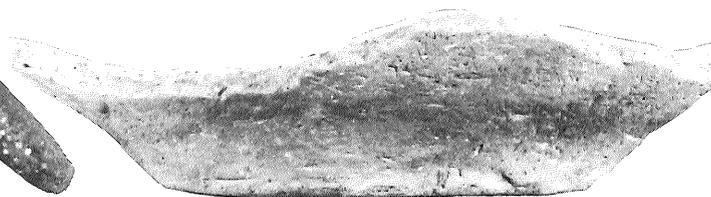
3H-13



1S-4



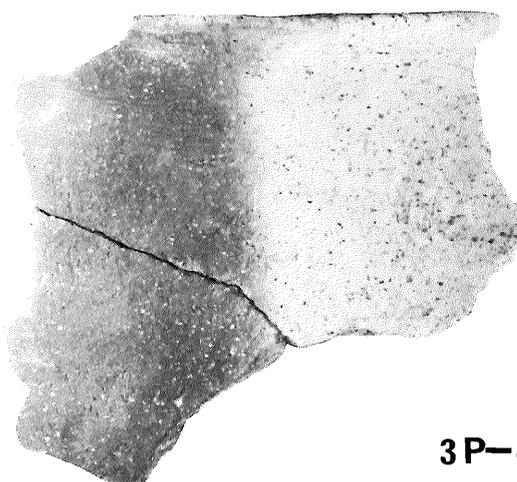
1S-5



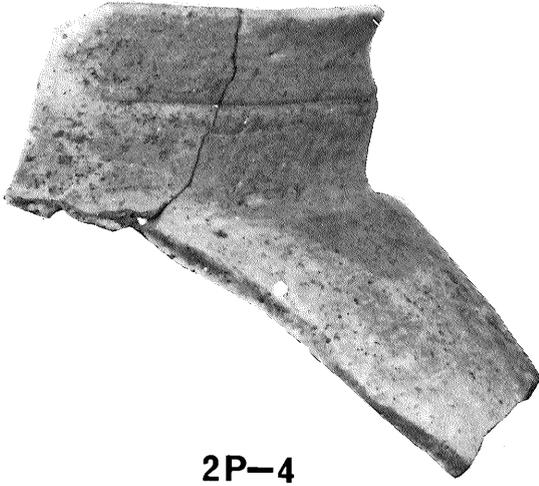
1S-6



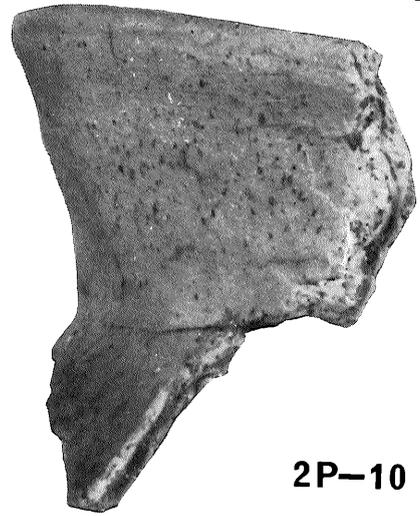
5H-1



3P-4



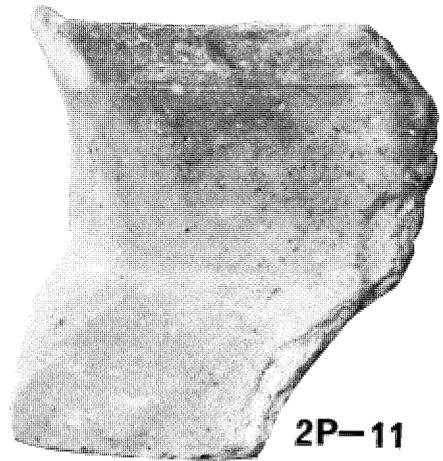
2P-4



2P-10



2P-5



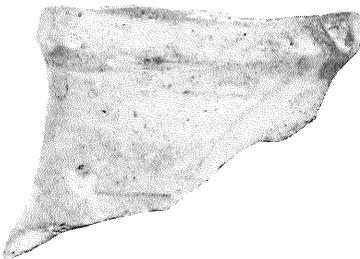
2P-11



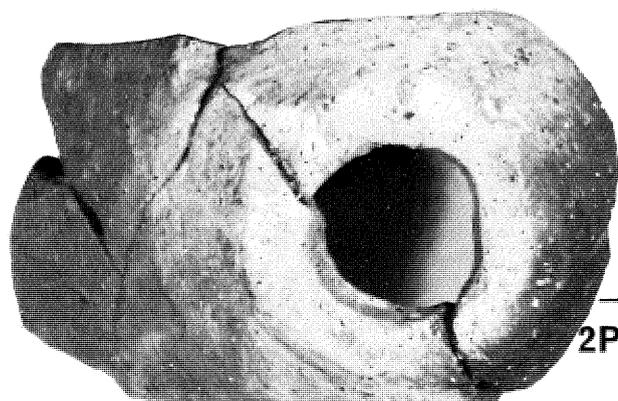
2P-7



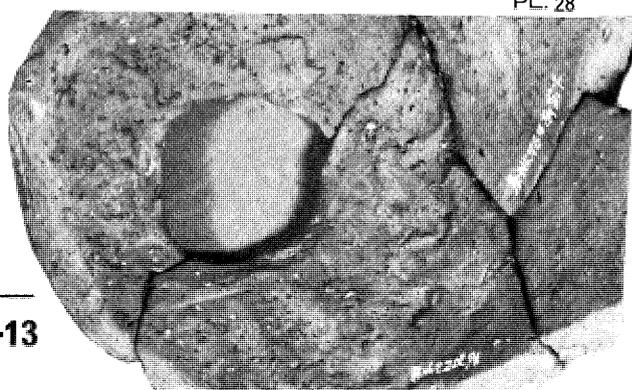
2P-12



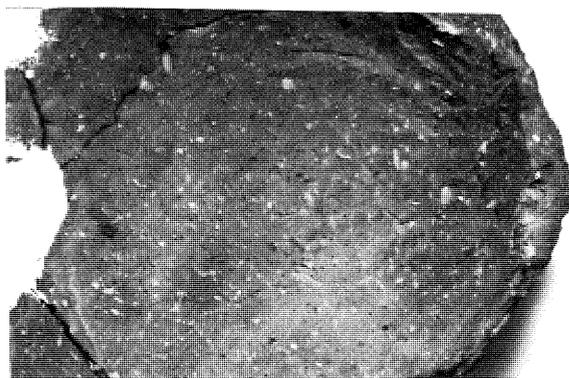
2P-9



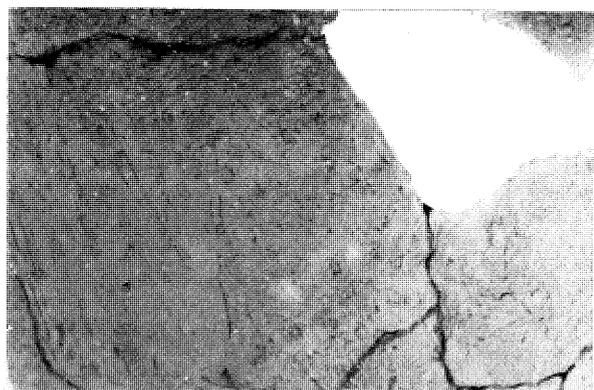
2P-13



2P-8



2P-6

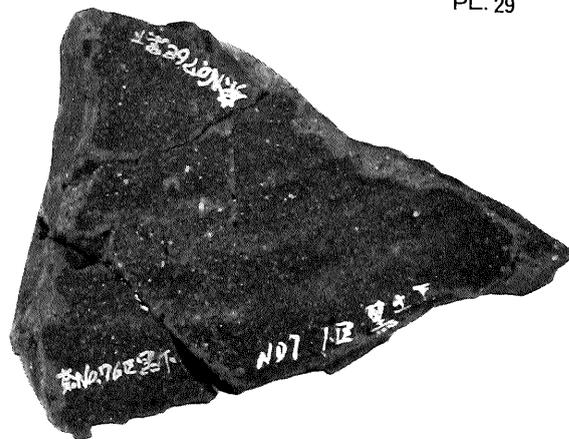


1H-2

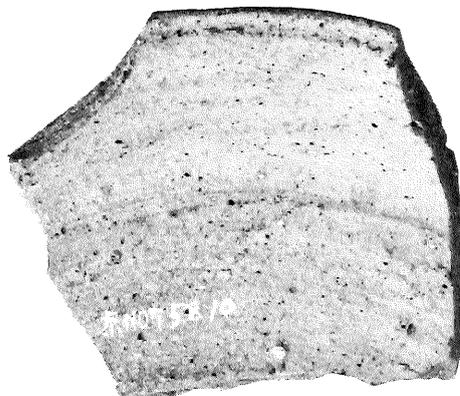




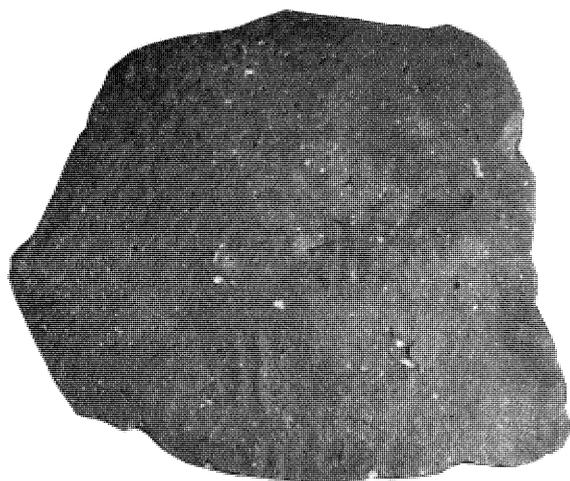
5H-2



1S-7

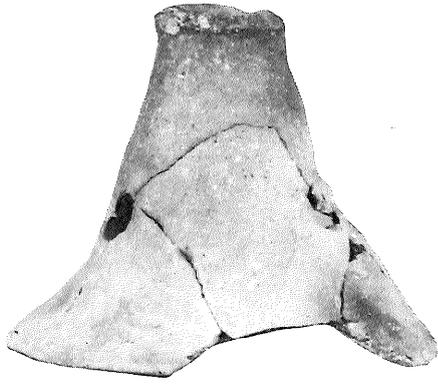


3S-1

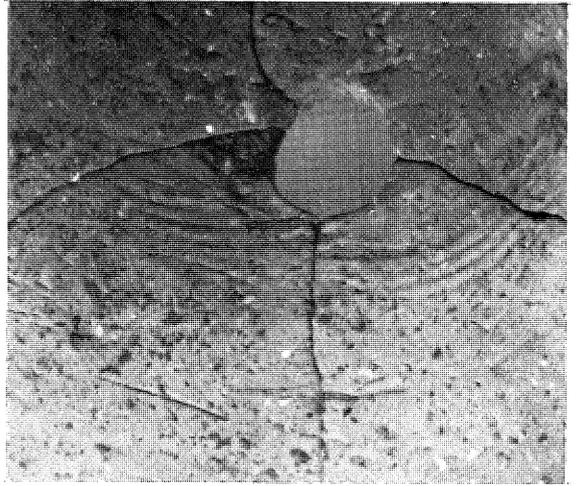


5H-3

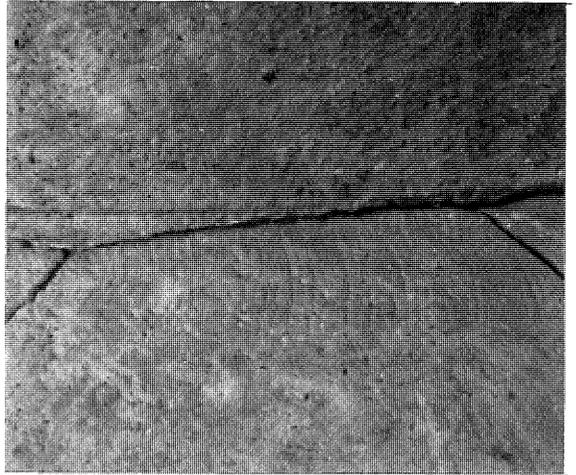




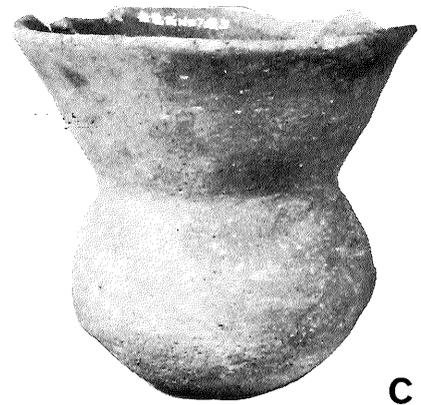
A



B



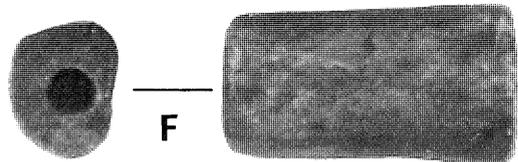
D



C



E



F



2号住居址出土遗物



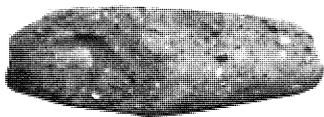
4号住居址出土遗物



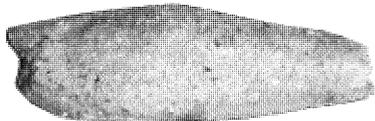
1号土塚出土遺物



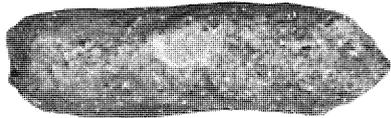
1H-3



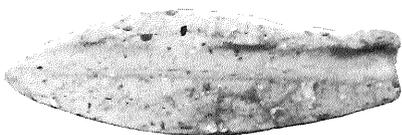
3S-4



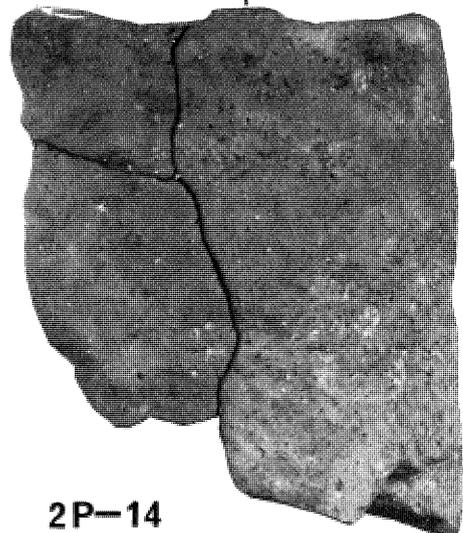
1H-4



1S-11



3S-3



2P-14

## V. ま と め

天神下、土用ヶ谷戸遺跡の発掘調査は、これまで述べてきたように、予想外の大きな成果が得られた調査であった。以下、それらについてまとめ、結びとしたい。

### 1. 遺跡の立地

第1～第10までの調査区のうち、遺物が層位的に検出されたものは、第3～第6調査区の4ヵ所である。第1、第2調査区は大部分が礫層であり、第7～第10調査区においては大部分粘土層であって遺物はほとんど見られない。第1～第4調査区は現集落地であり、第5～第10調査区は現水田地である。比高差は1mを測る。現集落地に位置する土用ヶ谷戸遺跡が高位に存在する遺跡であり、天神下遺跡が低位に位置する遺跡であるといえる。礫層の検出状況をみると第1～第4調査区までが標高29.4～29.5mとほぼ同一であり（第2調査は28.5以下）第5・第6調査区では標高28.2mである。第7～第10では検出されていない。このレベル差は現況と一致するものである。また、第1～第4調査区では礫層より上層にも砂・礫が多く含まれるのに対し、第5・第6では溝内覆土に限られるし、第7～第10調査区では全く見られない。このように、土用ヶ谷戸遺跡を中心とした高位地区と、第7～10調査区の低位地区では、土層堆積状況が全く異り、前者は荒川の、後者は利根川の系統であり、両者の中間に位置するのが第5・6調査区天神下遺跡であると言える。

### 2. 土壌分析

天神下遺跡第5調査区内に検出された、北東から南西へ伸びる溝址内に堆積する砂層を中心に、その成因を求めて実施したもので、パリノ・サーヴェイ株式会社に分析を委託した。

この結果、第5調査区8・9層、第4調査区13層にテフラの含有が認められ、他の溝内堆積砂層（17・18・33・35・36・38・39・44・53・66層）は、岩質・深度等によらず同様に、重・軽鉱物ともに風化粒子・岩片等が半分以上占める。このことから、第4・第5調査区両地点の埋積関係について「第5調査区の溝は、下限付近に認定できる火山灰がなかったの、いつ頃から埋積が開始されたのかは不明である。しかし浅間Bが8層に認められ、9層にも若干みられることから、1108年頃には溝は埋積が終了していた。溝内の堆積物は流路を変更させながら砂礫層、粘土層がレンズ状に堆積し、これらの堆積物は、チャート・結晶片岩・砂岩・礫岩等を含み、台地上の風成風化火山灰層とは異なる鉱物組成を示す。おそらく堆積物の供給源は、三波川帯・秩父帯が広く分布する関東山地と考えられる。第4調査区の堆積関係は、基底礫層（15層）上の13層にF Aが認められるので、6世紀前半には埋積が開始されていたと考えられる。」また、第4調査区6層は分析資料としてなかったが、肉眼では、第5調査区8層と同一様相を呈している為、同一層と考えられる。浅間Aは全調査区で検出されている。同時に花粉分析では、第4・第5地区には大部分二次堆積であり、植生を判断するに至らない。しかし、第7～10調査区において、縦筋の酸化鉄が多量に見られ、古くから水田耕作が行なわれた状況を呈し、別府条里遺跡（Fig. 2 ※1）の一画を占める可能性が高いと考えられる。

### 3. 検出された遺構

天神下遺跡第5調査区で検出された溝は、1で述べたように、低位遺跡の東端を画する位置を占めるものであり、遺跡地の西への拡がりを示すものである。天神下遺跡は、両調査区から出土した遺物から、弥生時代後期から平安時代に及び、古墳時代後期が主体を成すと考えられる。

以上のように、土用ヶ谷戸・天神下両遺跡の発掘調査は、当地区における埋積過程の差と、土地利用の差、集落の在り方を知る上で重要な成果を上げることができたと思う。

送電線路増強工事（東埼玉線）に伴う  
埋蔵文化財調査報告書

## 天神下・土用ヶ谷戸遺跡

発行 昭和59年7月31日

熊谷市教育委員会  
東京電力(株)埼玉支店

印刷 (株)博文社